帝國讀本

改制新版

卷十

375.9
Ha7
資料室

41603
教科書文庫
4
810
41-1938
2000301816

文部省檢定濟

昭和十三年一月十日　中學校國語漢文科

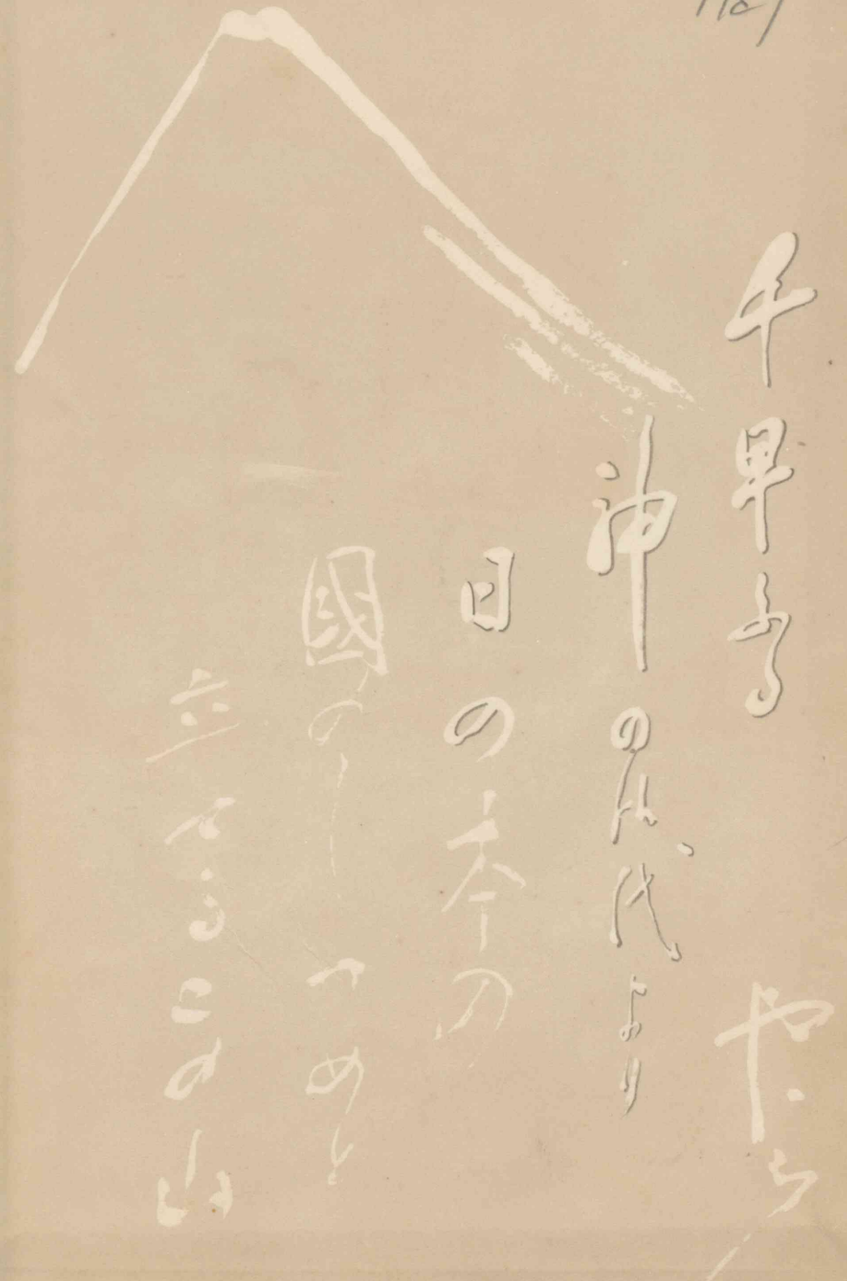
帝國讀本

改制新版

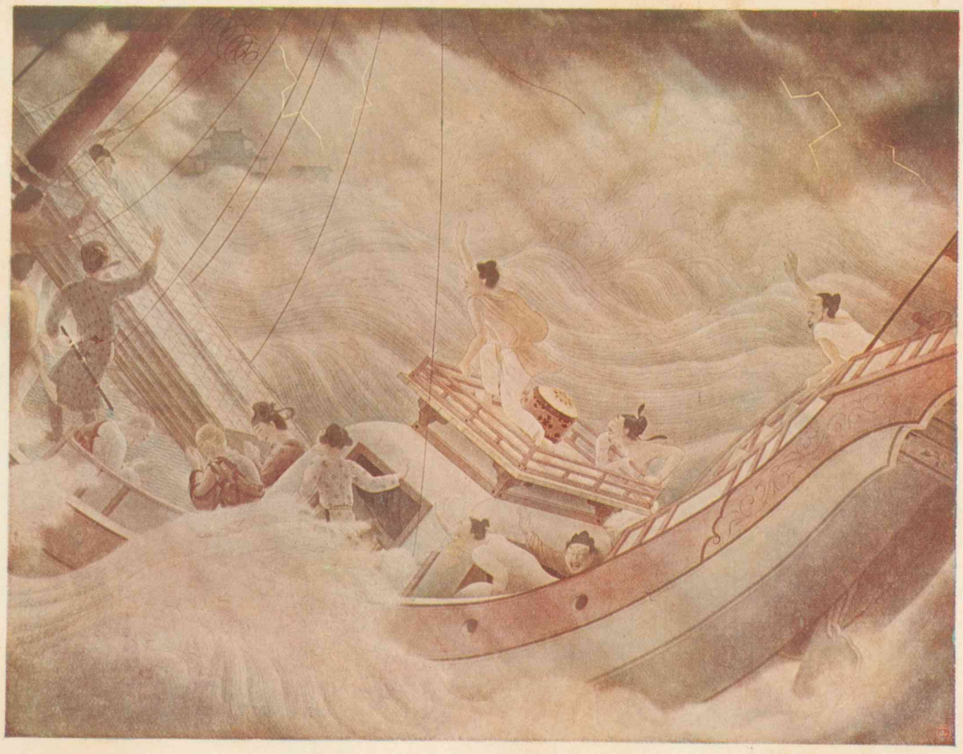
文學博士　芳賀矢一　編
文學博士　上田萬年
文學士　長谷川福平　訂補

合資會社　冨山房發兌

資料室
375.9
H27



山口大学 教養 35398 図書



陸近し　中村岳陵筆

帝國讀本　改制新版　卷十

目次

一　菊花の約その一……上田秋成……一
二　菊花の約その二……上田秋成……六
三　徒然草その五……吉田兼好……一四
花はさかりに……一四
能をつかんとする人……一六
一道にたづさはる人……一六
さしたる事なくて……一八
今日はその事をなさんと思へど……一八
萬づの事は頼むべからず……一九

主ある家……二〇
四　岡部日記……賀茂眞淵……二一
家路……二二
箱根山……二四
岡部の家……二七
五　道まなぶ人……松平定信……二八
道まなぶ人……二八
人を見るに心得べきこと……二九
下を恵む道……二九
志……三〇
鷹の羽にすむ蟲……三一
六　言靈の幸はふ國……別所梅之助……三三
國語の愛護（自修文）……五十嵐力……三八

七　萬葉集の歌……四四
八　法成寺の造營……（榮華物語）……四八
九　かぐや姫の昇天その一……（竹取物語）……五三
一〇　かぐや姫の昇天その二……（竹取物語）……五八
一一　羽衣（謠曲）……六三
一二　春は曙……清少納言……六八
四季……六八
降るものは……六九
雲は……六九
あてなるもの……六九
木の花は……七〇
香爐峯……七二
一三　須磨の浦波……紫式部……七三

一四　古事記よりその一……太安萬侶…七六
一五　古事記よりその二……太安萬侶…八〇
一六　古事記を通じて見た我が祖先の生活……相馬御風…八三
一七　上代耕人の生活……武田祐吉…九三
一八　上代の祭祀と祝詞……次田潤…一〇二
上古史を讀んで（自修文）……一一
一九　皇道……清原貞雄…一一八
二〇　都がへり……紀貫之…一二八
別離……一二八
海路……一三〇
都がへり……一三三
二一　美しい心を保て……吉田絃二郎…一三六

廣島大學圖書之印

帝國讀本　改制新版　卷十

一　菊花の約　その一

上田秋成[一]

青々たる春の柳、家園に種うること勿れ。交は輕薄の人と結ぶこと勿れ。楊柳茂り易くとも、秋の初風の吹くに耐へめや。輕薄の人は交り易くして、去るもまた速なり。楊柳幾たび春に染めども、輕薄の人は絶えて訪らふ日なし。

播磨國加古[二]の驛に丈部左門といふ博士あり。清貧をあまなひて、友とする書の外は、すべて調度の煩はしきを厭へり。老母あり、孟母の操に讓らず、常に紡績を事として、左門が志を助けぬ。その季女なる者は同じ里の佐用氏に養はる。この佐用が家は頗る富榮えてありけるが、丈部母子の賢きを慕ひ、娘子を娶りて親族となり、屢〻事に

（一）江戸時代の文學者。無腸翁、剪枝畸人の號がある。文化七年（一八一〇）歿、年七十八。
（二）今兵庫縣加古郡加古川町。
清貧をあまなふ

一命筥七判任
二命貨大夫奏任
三命貨郷　郡任

託せて物を贈ると雖も、「口腹の爲に人を累さんや」とて、敢へて受くる事なし。

一日、左門同じ里の何がしが許を訪らひて、古へ今の物語して興じける時、壁を隔てゝ人の苦しむ聲いとも哀れに聞えければ、主に尋ぬるに、主「西の國の人と見ゆるが、伴に後れし由にて、一宿を求めらるゝに、士家の風ありて卑しからぬと見しまゝに、逗め參らせしに、その夜邪熱劇しく、起臥も思ふに任せぬがいとほしさに、三日、四日を過しぬれど、いづちの人とも定かならぬに、主も思ひがけぬ過し出でゝ、心地惑ひ侍りぬ」と言ふ。左門聞きて、「悲しき物語にこそ。主の心安からぬもさる事にしあれど、病苦の人のしるべなき旅の空にこの疾を憂へ給ふは、わきて胸苦しくおはすべし。そのやうをも看ばや」と言ふを、主とゞめて、「瘟病は人を過つものと聞ゆるから、家童等にも敢へて彼所に行かしめず。立寄りて身を害し給ふこと勿

死生命あり

漂客

れ」。左門笑うて言ふ、「死生命あり、何の病か人に傳はるべき。これ等は愚俗の言にて、吾が輩は取らず」とて戸を推して入りつゝその人を見るに、主が語りしにたがはで、なみの人にはあらぬが、病深しと見えて、面は黄に、肌黑く瘦せ、古き衾の上に悶え臥す。人懐かしげに左門を見て、「湯一つ惠み給へ」と言ふ。左門近く寄りて、「士憂へ給ふこと勿れ。必ず救ひ參らすべし」とて、主と計りて藥を選み、自ら方を案じ、自ら煮て與へ、なほ粥を進めて病を看ること同胞の如く、誠に捨難き有樣なり。かの武士、左門が愛憐の厚きに涙を流して、「かくまで漂客を惠み給ふ。死すとも御志に報い奉らん」と言ふ。左門慰めて、「力なき事はな聞え給ひそ。凡そ疫には日數あり、その程を過ぎぬれば壽命を過たず。吾日々に詣でゝ仕へ參らすべし」と實やかに契りつゝ、心を用ひて助けけるに、病やゝ減じて、心地清しく覺えければ、かの士、主にも懇に詞を盡し、左門が陰德を尊みて、その生業をも尋ね、己

(一)今の島根縣松江市。
(二)島根縣（出雲國能義郡。今廣瀬町の字。
(三)仁多郡三澤城主三澤氏。城地は今三澤村と言ふ。
(四)飯石郡三刀屋城主三刀屋氏。城地は今三刀屋町と一宮村とに分れる。

が身の上をも語りて言ふ「吾はもと出雲國松江の郷に人と成りし赤穴宗右衛門といふ者なるが、僅かに兵書の旨を明らめしにより、富田の城主鹽冶掃部介、吾を師として物學び給ひぬ。さても吾、近江の佐佐木氏綱への密使に選ばれて、かの館に逗るうち、前の城主尼子經久、山中黨を語らひて、大晦日の夜不慮に城を乘取りしかば、掃部殿も討死ありしなり。もとより雲州は佐々木の持國にて、鹽冶は守護代なれば、三澤、三刀屋を助けて經久を亡し給へと勸むれども、氏綱は外勇にして內怯なる愚將なれば果さず、却りて吾を國に逗む。故なき所に永く居らじと、己が身一つを竊みて國に還る路にこの疾に罹りて、思ひがけずも師を煩はしけるは、身に餘りたる御恩にこそ。吾半生の命をもて必ず報い奉らん」左門言ふ「見るところに忍びざるは、人たる者の心なるべければ、厚き詞ををさむるに故なし。なほ逗りていたはり給へ」と言ふに、赤穴實ある詞をたよりにおろ〳〵語り出でゝ、問ひ辨ふる心愚かならず。終に兄弟の盟をなす。赤穴五歲長じたれば、兄たるべき禮儀ををさめて、左門に向ひて言ふ「吾父母に別れ參らせていとも久し。賢弟が老母はやがて吾が母なれば、新たに拜み奉らん事を願ふ。老母憐みて幼き心を受け給はんや」左門喜に堪へず「母なる者常に吾が孤獨を憂ふ。信ある詞を告げなば、齡も延びなんに」と、伴なひて家に歸る。老母喜び迎へて「吾が子不才にて學ぶところ時に遇はず、青雲の便りを失ふ。願はくは捨てずして兄たる教を施し給へ」赤穴拜して言ふ「大丈夫は義を重しとす。功名富貴は言ふに足らず。吾今母公の慈愛を蒙り、賢弟の禮を受く。何の望かこれに過ぐべき」と、喜び嬉しみつゝぞまた日頃を逗りける。

青雲の便り

問はでもしるし

昨日今日咲きぬると見し尾上の花も散果てゝ、涼しき風による浪に、問はでもしるき夏の初になりぬ。赤穴、母子に向ひて「吾が近江を遁れ來りしも、雲州の動靜を見ん爲なれば、一たび下りてやがて歸り來り、御恩を返し奉るべし。今の別れを賜へ」と言ふ。左門言ふ「さあらば兄長いつの時にか歸り給ふべき」赤穴言ふ「月日は逝き易し。遲くともこの秋は過さじ」左門言ふ「秋はいつの日を定めて待つべき。願はくは約し給へ」赤穴言ふ「重陽の佳節をもて歸り來る日とすべし」左門言ふ「兄長必ずこの日を誤り給ふな。一枝の菊花に薄酒を備へて待ち奉らん」と、互に情を盡して、赤穴は西に歸りけり。

二　菊花の約　その二

あら玉の月日は疾く經ゆきて、下枝の茱萸色づき、垣根の野ら菊にほひやかに、九月にもなりぬ。九日はいつよりも早く起出でゝ、草

人の心の秋

氷輪

の屋の席を拂ひ、黃菊白菊二枝三枝小瓶に插し、囊をかたぶけて酒飯の設をす。老母言ふ「かの八雲たつ國は山陰の果にありて、此所へは百里を隔つと聞く。今日とも定め難きに、その來しを見てものすとも遲からじ」左門言ふ「赤穴は信ある武士なれば、必ず約を誤らじ。その人を見てあわたゞしからんは、思はん事の恥づかし」とて、美酒を買ひ、鮮魚を煮て廚に備ふ。

午時も稍傾きぬれど、待ちつる人は來らず。西に沈む日に宿り急ぐ足のせはしげなるを見るにも、外の方のみまもられて、心醉へるが如し。老母、左門を呼びて「人の心の秋にはあらずとも、菊の色濃きは今日のみかは。歸り來る信だにあらば、空は時雨に移り行くとも何をか怨むべき。入りて臥しもして、また明日の日を待つべし」とあるに否み難く、母をすかして前に臥せしめ、若しやと戸の外に出でて見れば、銀河影消えく に、氷輪吾のみを照して寂しきに、軒守る

犬の吼ゆる聲澄渡り、浦波の音ぞ此所もとにたち來るやうなる。月の光も山の端に暗くなれば、今はとて戸を立てゝ入らんとするに、唯看る、朧なる黑影の中に人ありて、風のまに〳〵來るを怪しと見れば、赤穴宗右衞門なり。躍りあがる心地して、「小弟早くより待ちて今に至りぬ。盟たがへで來り給ふ事の嬉しさよ。いざ入らせ給へ。」と言ふめれど、唯うなづくのみにて物をも言はず。左門前に進みて南の窓の下に迎へ、座に著かしめ、「兄長來り給ふ事の遲かりしに、老母も待ちわびて、明日こそと臥所に入らせ給ふ。覺まさせ參らせん。」と言ふに、赤穴また頭を振りて止めつゝ、更に物をも言はず。左門言ふ、「既に夜をつぎて來給ふに、心も倦み、足も疲れ給ひつらん。幸ひに一杯を酌みてやすませ給へ。」とて、酒を煖め、下物を列ねて勸むるに、赤穴袖をもて面を掩ひ、その臭を忌みさくるに似たり。左門言ふ、「井臼のつとめ、はたもてなすに足らざれども、己が心なり。いやしみ給ふ

下物

井臼のつとめ

腹心爪牙

こと勿れ。」赤穴なほ答もせで、長き息をつきつゝ、しばしして言ふ、「賢弟が信ある饗應をなど否むべき理あらん。欺くに詞なければ、實をもて告ぐるなり。必ず怪しみ給ひそ。吾は現世の人にあらず、きたなき靈の、假に形を見せつるなり。」左門大いに驚きて、「兄長何故にこの怪しき事語り出で給ふや。更に夢とも覺え侍らず。」赤穴言ふ、「賢弟と別れて國に下りしが、國人大方經久が勢につきて、鹽冶の恩を顧る者なし。從弟なる赤穴丹治の富田の城にあるを訪らひしに、利害を說きて吾を經久に見えしむ。假にその詞を容れて熟、經久が爲すところを見るに、萬夫の雄人に勝れ、能く士卒を訓練すと雖も、智を用ふるに狐疑の心多くして、腹心爪牙の家の子なし。永く居りて益なきを思ひて、賢弟が菊花の約ある事を語りて去らんとすれば、經久怨める色ありて丹治に令し、吾を大城の外に放たずして、終に今日に至らしむ。この約にたがふものならば、賢弟吾を何者とかせんと、

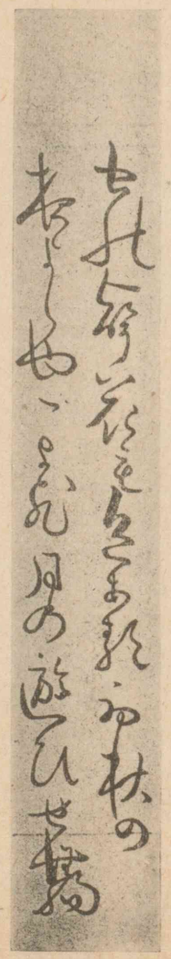
ひたすら思ひ沈めども、遁るゝに方なし。古への人の言ふ、人一日に千里を行くこと能はず。魂能く一日に千里をも行くと。この理を思ひ出でゝ、自ら刃に伏し、今夜陰風に乘りて遙々來り、菊花の約につく。この心を憐み給へ。と言ひ終りて、涙涌出づるが如し。今は永き別なり。唯母公に能く仕へ給へ。とて、座を起つと見しが、かき消す如く見えずなりにけり。左門あわてゝ止めんとすれば、陰風に眼眩みて行方を知らず。俯伏につまづき倒れたるまゝに、聲を放ちて大いに哭く。老母目ざめ、驚き立ちて左門がある所を見れば、座上に酒瓶、魚盛りたる皿ども數多列べたるが中に伏倒れたるを、いそがはしく扶け起して、「いかに。」と問へども、唯聲を呑みて泣く〳〵。更に詞なし。老母問うて言ふ、「伯兄赤穴が約にたがふを怨むとならば、明日若し來らば詞なからんものを。汝かくまで幼くも愚かなるか。」と強く諫むるに、左門漸く答へて言ふ、「兄長今夜菊花の約にわざ〳〵來る。酒肴をもて迎ふるに、再三辭み給うて言ふ、しか〳〵のやうにて約に背くが故に、自ら刃に伏して陰魂百里を來ると言ひて、見えずなりぬ。それ故にこそは母の眠をも驚かし奉れ。唯々赦し給へ。」とさめざめと泣入るを、老母言ふ、「牢裏に繫がるゝ人は夢にも赦さるゝを見、渇する者は夢に漿水を飲むと言へり。汝もまたさるたぐひにやあらん。能く心を鎭むべし。」とあれども、左門頭を振りて、「眞に夢のまさなきにあらず、兄長は此所もとにこそありつれ。」と、また聲を揚げて泣き倒る。老母も今は疑はず、相よびてその夜は泣きあかしぬ。

漿水

虫の聲花も色ある初秋の夜よしやこよひ月の遊ひせむ　無腸

まさなし

身を翰墨によす



上田秋成筆蹟

あくる日左門、母を拜して言ふ、「吾幼より身を翰墨によすと雖も、國に忠義の聞えなく、家に孝信を盡さず、徒に天地の間にをるのみ。

兄長赤穴は一生を信義の爲に終ふ。小弟今日より出雲に下り、せめては骨を藏めて信を全うせん。尊體を保ち給うて、暫くの暇を給ふべし。」老母言ふ、「吾が兒彼所に去るとも、早く歸りて老が心を休めよ。永く逗りて、今日を久しき日となすこと勿れ。」左門言ふ、「生は浮きたる泡の如く、旦に夕を定め難くとも、やがて歸り參るべし。」とて、涙を振うて家を出で、佐用氏に行きて老母の介抱を懇に賴み聞え、出雲國に罷る路に、飢ゑて食を思はず、寒きに衣を忘れて、まどろめば夢にも泣きあかしつゝ、十日を經て富田の大城に至りぬ。先づ赤穴丹治が家に行きて、姓名をもて言入るゝに、丹治迎へ請じて、「翼ある者の告ぐるにあらで、いかで知らせ給ふべき謂れなし。」と頻りに問ひもとむ。左門言ふ、「士たる者は富貴消息の事共に論ずべからず、唯信義をもて重しとす。兄長宗右衛門一旦の約を重んじ、空しき魂の百里を來るに報すとて、日夜を逐うて此所に下りしなり。吾が學ぶと

忌むべき事
(一)支那秦の政治家。法治を以て秦を富强にした。

ころについて士に尋ね參らすべき旨あり。願はくは明らかに答へ給へかし。」昔魏の公叔座病の床に臥したるに、魏王自ら詣でゝ、手を執りつゝ告げけるは、『若し忌むべき事あらば、何人をして社稷を守らしめんや。吾が爲に教を遺せ。』とあるに、叔座言ふ、『(一)商鞅年少しと雖も奇才あり。王若しこの人を用ひ給はずば、これを殺しても境を出すこと勿れ。他の國に行かしめば、必ず後の禍となるべし。』と懇に教へて、また商鞅を私かに招き、『吾汝を薦むれども、王許さゞる色あれば、用ひずばかへりて汝を害し給へと教ふ。これ君を先にし、臣を後にするなり。汝早く他の國に去りて害を免るべし。』と言へり。この事、士と宗右衛門とに比べてはいかに。」丹治唯頭を低れて詞なし。左門座を進みて、「兄長宗右衛門、鹽冶が舊交を想ひて尼子に仕へざるは義士なり。士が舊主の鹽冶を捨てゝ尼子に降りしは士たる義なし。兄長が菊花の約を重んじ、命を捨てゝ百里を來しは信ある限りな

横死

家眷

(一)吉野朝時代の歌人、文學者。京都の人。正平五年(一三〇一年)歿、年六十八。

り。士が今尼子に媚びて骨肉の人を苦しめ、この横死をなさしめしは友とする信なし。經久強ひてとゞめ給ふとも、久しき交を思はゞ、私かに商鞅、叔座が信を盡すべきに、唯榮利にのみ走りて士家の風なきは、卽ち尼子の家風なるべし。さるから兄長何故この國に足を逗むべき。吾今信義を重んじて、わざ〳〵此所に來る。汝はまた不義の爲に汚名を遺せ」とて、言ひも終らず拔打に斬りつくれば、一刀にて其所に倒る。家眷ども立騷ぐ間に、早く逃れ出でゝ跡なし。尼子經久この由を傳へ聞きて、兄弟信義の篤きを憐み、左門が跡をも強ひて追はせざりきとなり。あゝ、輕薄の人と交は結ぶべからずとなん。

——雨月物語——

三　徒然草その五

吉田兼好

花はさかりに

(一)「たれこめて春のゆくへも知らぬ間に待ちし櫻もうつろひにけり」(古今集、藤原因香)

花はさかりに月は隈なきをのみ見るものかは。雨に向ひて月をこひ、(一)たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほ哀れに情深し。咲きぬべき程の梢、散りしをれたる庭などこそ見所多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、はやく散りすぎにければ」とも、「さはる事ありてまからで」なども書けるは、「花を見て」と言へるに劣れる事かは。花の散り月の傾くを慕ふ習はさる事なれど、殊にかたくなる人ぞ、「この枝かの枝散りにけり。今は見所なし」などは言ふめる。

望月の隈なきを千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて待ちいでたるがいと心ふかう、青みたるやうにて、深き山の杉のこずゑに見えたる、木の間のかげ、うちしぐれたるむら雲がくれの程、またなく哀れなり。しひ柴、白がしなどのぬれたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがなと、都こひしう覺ゆれ。

手が咲ばって見ん様になるかたほ十人々でなる骨

技

能をつかんとする人

能をつかんとする人、よくせざらん程は、なまじひに人に知られじ、うちうちよく習ひ得てさし出でたらんこそ、いと心にくからめ、と常に言ふめれど、かく言ふ人、一藝も習ひ得る事なし。未だ堅固かたほなるより上手の中にまじりて、そしり笑はるゝにも恥ぢず、つれなくすきて嗜む人、天性その骨なけれども、道になづまず、みだりにせずして年を送れば、堪能の嗜まざるよりは、終に上手の位に至り、徳たけ、人にゆるされて、ならびなき名を得る事なり。天の下のものの上手といへども、初は不堪の聞えもあり、むげの瑕瑾もありき。されども、その人、道のおきて正しく、これを重くしてはうらつせざれば、世の博士にて萬人の師となる事、諸道かはるべからず。

一道にたづさはる人

一道にたづさはる人、あらぬ道のむしろにのぞみて、あはれ我が

携携

道ならましかば、かくよそに見侍らじものを」と言ひ、心にも思へること、常の事なれど、よにわろく覺ゆるなり。知らぬ道の羨ましく覺えば、「あな羨ましなどか習はざりけん」と言ひてありなん。

兼好法師

我が智を取出でて人に争ふは、角ある物の角をかたぶけ、牙あるものの牙をかみ出すたぐひなり。人としては善に誇らず、ものと争はざるを徳とす。他にまさる事のあるは大いなる失なり。しなの高さにても、才藝のすぐれたるにても、先祖の譽にても、人にまされりと思へる人は、たとひ言葉に出でてこそ言はねども、内心にそこばくのとがありぬべし。慢みてこれを忘るべし。こにも見え、人にも言ひけたれ、禍をも招くはたゞこの慢心なり。一道にも誠に長じぬる人は、自ら明らかにその非を知る故に、志常に

滿たずして、つひにものに誇る事なし。

さしたる事なくて人のがり行くは、よからぬ事なり。用ありて行きたりとも、その事はてなば、とく歸るべし。久しくゐたるいとむづかし。人と向ひたれば詞おほく、身もくたびれ、心も靜かならず、萬づの事さはりて、時をうつす。互のため益なし。いとはしげに言はんもわろし。心づきなき事あらんをりは、なか〳〵その由をも言ひてん。同じ心に向はまほしく思はん人の、つれ〴〵にて、「今しばし、今日は心靜かに」など言はんは、この限りにはあらざるべし。阮籍が青きまなこ、誰もあるべき事なり。その事となきに人の來りて、のどかに物語して歸りぬる、いとよし。また文も、「久しく聞えさせねば」などばかり言ひおこせたる、いと嬉し。

今日はその事をなさんと思へど

(一)晉の詩人。竹林七賢の一。阮籍は氣に入つた友が來れば青眼を見せ、氣に入らぬ友が來れば白眼を見せたと言ふ。(晉書、阮籍傳)

今日はその事をなさんと思へど、あらぬいそぎ先づ出で來てまぎれ暮し、待つ人はさはりありて、たのめぬ人は來り、頼みたるかたの事はたがひて、思ひ寄らぬ道ばかりはかなひぬ。わづらはしかりつる事は事なくて、安かるべき事はいと心ぐるし。日々に過ぎゆくさま、かねて思ひつるに似ず。一年の事もかくの如し。一生の間もまたしかなり。かねてのあらまし、皆たがひゆくかと思ふに、おのづからたがはぬ事もあれば、いよ〳〵ものは定め難し。不定と心得ぬるのみ、まことにてたがはず。

萬づの事は頼むべからず

萬づの事は頼むべからず。愚かなる人は深くものを頼む故に、うらみ怒る事あり。勢ひありとて頼むべからず、こはきもの先づ滅ぶ。財多しとて頼むべからず、時の間に失ひやすし。ざえありとて頼むべからず、孔子も時に遇はず。徳ありとて頼むべからず、顏回も、不幸

かねてのあらまし

ざえ

(一)孔子の高弟。字は淵。魯の人。

なりき。君の寵をも賴むべからず、誅を受くる事すみやかなり。奴したがへりとて賴むべからず、そむき走る事あり。人の志をも賴むべからず、必ず變ず。約をも賴むべからず、信ある事すくなし。身をも人をも賴まざれば、是なる時は喜び、非なる時はうらみず。左右廣ければ、ばさはらず。前後遠ければふさがらず。せばき時はひしげくだく。心を用ふる事少しきにして、きびしき時は、ものにさかひ爭ひてやぶる。寬くしてやはらかなる時は、一毛も損ぜず。人は天地の靈なり。天地は限るところなし。人の性何ぞ異ならん。寬大にしてきはまらざる時は、喜怒これにさはらずして、ものの爲にわづらはず。

ひしぐ

人は天地の靈

すゞろなる人

こだま

主ある家

主ある家には、すゞろなる人、心のまゝに入來る事なし。あるじなき所には、道行き人みだりに立入り、狐、ふくろふやうのものも、人げにせかれねば所得顏に入りすみ、こだまなどいふけしからぬ形も、あらはるゝものなり。また鏡には色かたちなき故に、萬づの影來りてうつる。鏡に色かたちあらましかば、うつらざらまし。虛空よくものを容る。我等が心に念々のほしきまゝに來りうかぶも、心といふものなきにやあらん。心に主あらましかば、胸のうちにそこばくの事は入來らざらまし。

念々

刹那々

四　岡部日記

賀茂眞淵(一)

家路

あはれ都にありつる程は、あからさまながら年のはに故郷に歸りなどしければ、さのみもあらざりしを、今はたやすくも歸るまじく思ひなしつれば、千里のをちに老いたるたらちねを置きまつりて、とみの事ありともいかでか知らん。知るともいかでかとみに行きいたらん。今やいかなる事かあらん、いかなる心にかますらんな

(一)江戸時代の國學者。遠江の人。明和六年(一七六九年)歿、年七十三。

(二)享保十八年(一七三三年)から四年間、京都に在て荷田春滿に師事してゐた。

(三)元文三年(一七三八年)江戸に出た。

人やりならぬ

ど、人やりならぬ胸さわがれつること日ごとにあり。しを、世のさがは哀れなるものにて、うつたへに忘るとにはあらねども、友がきもいで來て、高きいやしきゆきかひしけるに、二つなき心のまぎれやすくて過しぬ。この秋はいざなふ人さへあれば、いでや母をもをがみつま子、はらからにも逢はゞやとて、後の七月八日つとめて立ちいづ。

このあらましいふ頃、人々別をしむとて、から、やまとの歌、一百ばかりもあらんかし、そはこと物にしるしつ。友がきのなごりなきにしもあらねど、ちぎりおく日數いくばくならねば、先すゝまるゝ心には痛しとも思ほえず。

品川の驛わたりは、海の面ゆほびかなり。夜の雨晴れて、白雲おほく海の空にかゝれるは、伊豆のみ崎と安房の大山となり。この所は袖の浦とぞ言ふなど、かく奴のみだりに言ふはをかしきも

ゆほびか

(一)石廊崎。
(二)鋸山をいふか。

のから、いづくにまれ、ときあらひぎぬ著ん日までは、その名のゆかしきや。朝風いとゞしく身にしむに、

旅人は衣手さむししばしなほ
こゝろして吹け浦の秋風

「關吹きこゆる」など詠みけん、思ひ出でらる。富士の山はひつじさるの空に見ゆ。これぞおのが眺むる方なるに、故郷人はこなたをこそと思ふも、こたびはうれし。をちつとし東に來にける程に、

東路にありと聞きつる富士の嶺を
ゆふ日の空にかへりみるかな

と詠めて、限りなく遠くも來にけりとわびつるにはかはれり。

程ヶ谷の宿過ぐる程、空曇りみ晴れみたゞならねば、雨づゝみするに、しばらくして氣色やみにけり。藤澤の驛に宿らんとて行くに、品野阪と言ふ阪をくだれば、田の上、山もとなどに濁りたる水いと高

(一)「秋風の關吹越ゆるたびゝとに聲うち添ふる須磨の浦波」(新古今集)
(二)今横濱市保土ケ谷區。
(三)今神奈川縣高座郡藤澤町。

(一)神奈川縣にあり、高さ一二五三メートル。山中に阿夫利神社がある。祭神は大山祇神。

(二)畑宿。今足柄下郡湯本町の字。

(三)盧の湖。

(四)支那四川省。

(五)蜀を指す。「見説蠶叢路。崎嶇不レ易レ行。」（李白）

きは、こゝにしもいたく降りにけるなりけり。大山は今も降りぬべき雲のふるまひなり。この山ぞ阿夫利の神にておはします。

藤澤や野澤にごりてみなかみの
あふりの山に雲かゝるなり

箱根山

つとめて驛を立つ。夜の雨に道いとあしくて、從者わぶめり。大磯、小磯といふわたりは、よろぎが磯なるべし。夕づけて箱根山にかゝる。關までは苦しとて、畑といふ所に宿る。いとはや夜さむなれば、ねもいらぬに、瀧の音、鹿の聲、うちこめたる山の秋風、聞きあかされて立ちいでぬ。ほの〴〵と明けゆく山のかひよりかへり見れば、朝霧白く立渡れるは、海を見ん心地す。關こゆる程日さしのぼりて、湖の面のどかに見渡さる。かなたこなた山をめぐれる水の面は、三巴といふや似つらん。蠶叢に擬したる人はたればかりなるや。その後い

(一)「山從人面起。雲傍馬頭生。」（李白）

(二)萬葉集に見える。

くそばくの人かのぞみ見けん。この湖にさせる聞えなきぞあやなき。

すべてみ山は雨ばかり哀れなるはなし。こゝかしこくゆり出づる雲のうすき濃きに、山々は、おもかげばかりぞ見ゆる。「人面より起る。」と吟じて越えつる、苦しからぬにしもあらねど、あなをかしと見しはと言ふに、人々は「例のひが心にこそ。いぶせかるべき物ごのみなめり。龍にのるらん山人にやあつらへまし。」など笑ふ。からうじて三島の驛に至る。ふるき歌に「ちゝの實の父」とつゞけしは木の實にて、この國にありと言ふ人のありしかば、問ひもとむれど見知れる人もなし。

故郷のはゝその蔭は問ひゆけど
ちゝのみなきぞ悲しかりける

けふは雲まよひて富士も見えず。原の宿わたりより雨降らんと

す。富士川は明日こそ渡るべきを、水かさやまさりなん、夜をかけてだに蒲原の宿までいかで行かんとて、夕つかたより立ちまよふ雲のあしとともに急ぎつゝ行くに、雲晴れて、思はざるに月さやかに出でにけり。

夜ふねこぐ富士の川とに霧はれて
たかねにいづる月を見るかな

ゆふべの雲のいざなはざらましかば、かゝる所の月は見ざらましを、心ありけりなど言ひあへり。

ゆふつけて天龍川渡る。昔の歌には天の中川とぞ詠みたる。人々むかへにとて來つゝ、老人の事なき由先づ言ひて、いとめづらしと思ひたる氣色どもゝうれしくて、

まれに渡る天の中川なか〳〵に
うれしき瀬にも袖ぬらしけり

川と

(一)「よしさらば身を浮木にて渡りなん天つみ空の中川のみづ」(海道記)

岡部の家

暮過ぐる程岡部の家にいたる。まことに門によりて待受け給ふ。いとき、なき姪どもなど、走せ來れども、見知らぬ顔なればにやあらん、とみにもむつれず。なれしばかりの人々は、髮のよもぎは似ずなりぬめれど、くにぶりの詞のみやしるかりけん、いづれの所よりとは問はざりける。常はしたしからぬさへ訪ひ來て、日に〳〵かたらふに、庭のよもぎも露かわくひまのありげなり。こゝにまで來りにければ京にもと思ひぬれど、東にちぎりつる日數しあれば、こたみはえまうでぬを、やんごとなきあたり、あしからず申し入れ給ひねと、文つかはす。

(一)濱松市伊場。眞淵の生地。

くにぶりの詞

五つのつね
五つのみち

(一)白河城主。田安宗武の第七子。老中を退隱し、後幕府のなりたてしと號し、樂翁と號した。學問を好み、和歌文章をよくした。善政を施こし、二年四年十九年二十年、二文化七年(一八二〇)歿。

五　道まなぶ人

道まなぶ人

(一)松平定信

かの人は雪ほたる集めし窓に年を積みて、ふみ見る道に心を盡し侍るなり、されば世の中の事には、いと疎く侍りと言へば、さるこそ誠の道まねぶ人なりけれと、ほめものする者もありとや。もとより道まねぶ者は、五つのつね、五つのみちよりして人ををさめ、己ををさむる道まねぶよりほかの事はなし。されば世の事にさとく、今のあたりのみかは、千とせのさきつ世の事、見ぬもろこしのむかし今の様より、さかりおとろふるきざし、人の心の上より、仕ふる道のくさ〴〵に至るまでも明らかなるをこそ、道まねぶ人とは言ふべけれ。この世の事におろそかにては、いかで道まねぶ人とは言ふべからんと。

人を見るに心得べきこと

ある翁に、かの人はいかなる人にかと問へば、いとよき人なりと答ふ。彼はと言へば、よき人と言ふ。必ず彼をば悪しきと言はんを選びて尋ねみるに、よき人と答ふ。いかなることぞと尋ねしに、「人を見るには、先づ十にして五つばかりもよき事あるは、いとよき人と見るべし。十にして一つ二つもよき事あるはよき人なり。十にして皆悪しきをば悪しきと心得給へ」と言ひしとぞ。こは人をかく見るなり。われを見るの道ならず。善きも悪しきも、かろきとおもきとのわかちもあらんかし。

下を恵む道

あるやんごとなき人、「旅の路は早くいねて、つかれをだに休めなば、下が下までも憂き事はあらじ。さらば早くやどりを立出でて、早くやどりにつくに如かず。これぞ下を恵む道なれば、喜びぬべし」と

言ひけり。先づその君早くやどりにつきて、かうしおろし、ともし出して晝の半ば頃よりいぬれど、下の者は我が心のまゝならず、人のいぬる頃ならではいね難し。殊に晝のうちはさわがしく、道行く人も絶えぬを、世の人に背きて夜なりけりとも言難く、いねんとする頃その君ははや起出でて、夜半にともそろへて立つめり。下を憐む心はあれど、上の心もて下を見るより、かくはたがふなり。惠む心ありて下の事知らねば、かくぞありける。

志

「生れて物おぼゆる頃より老いゆくまで、聊かも怠らずする事あらば、必ずいかなるわざにも秀でぬべし。」と言へば、「たゞに心もちふるにあらざれば、幾たびなすとても得べしとは思はず。この飯くひ、汁すふは、物おぼえてより日にみたびはかくる事なけれども、かくせんと思ふ心なければ、飯くふに上手もなく、かへりてくひこぼし、またはいをの骨たてしよなど言ふもあるべし。されば、かくせんと思ふ志のひとつなり。」と言ひし。

鷹の羽にすむ蟲

鷹の羽にすむ蟲ありけり。空高く飛びかける時は、遙かに人の住家などをも見くだしつゝ、我は事足れる身かな、翼も動かさで千里の遠きに行通ひ、雲居のよそまでもあがるめり。殊に樣々の鳥は皆怖れてにげ走るゝ。げにも我に勝つものは大方あらじなど思ひつつ、かの鷹の毛のうちにゐつゝ、頻りにしゝむらをさし、血を吸ひてゐしが、そのやからいと多くなりもてゆきしにや、つひにその鷹も斃れにけり。それより自ら出でて飛びかけらんと思へども飛び得ず、走らんと思へども速ならず。血もつき、しゝむらもかれぬれば、今は命繋ぐやうもなし。からうじて先づその毛のうちを潛り出でてはひ行けば、雀の子のゐたりけり。我を怖れなんと見れば、雀の子は

しゝむら
やから

知らぬ樣なり。いかにして見附けざるかと傍にはひよれば、嬉しげに見て、くちばしさしいだして、ついばまんとす。例なき事なれば、怖しくてにげ隱れぬと、かの友どちに語りにけり。　―花月草紙―

六　言靈の幸はふ國

別所梅之助

島の國日本は、いつも外國の文化を學ぶのに忙しかつた。あをによし奈良の御代にも、遣唐使が屢〻かの國へと向つた。さういふ人々は、浪風に弄ばれて、思はぬ地に漂ひ著いたり、渡津海の底に沈んだりした。聖武天皇の天平五年、多治比の廣成が大使としてその危きを冒す事になつた時、嘗て自分も遠く海を渡つた經驗のある山上憶良が、これに好去好來の歌を贈つた。

神代よりいひつてけらく、
そら見つ倭の國は、
すめ神のいつくしき國、
言靈のさきはふ國と、

(一)宗教家、宗教學者。明治七年(一八七四年)東京市に生れた。
(二)第四十五代。
(三)元明、元正、聖武の三天皇に仕へた。文學を好み、詩を善くした。天平十一年(一七三九年)歿。
(四)萬葉集卷五。

語りつぎいひつがひけり、
と筆を起し、
海原のへにも沖にも、
もろ〳〵の大御神たち、
と行く手を祝ひ、さて
ことをへて歸らん日には、
船の舳に御手うちかけて、
また更に大御神たち、
墨繩をはへたる如く、
神づまりうしはきいます、
船のへに導きまをし、
値賀の島から難波津まで、まつすぐに著くやう、つゝがなくお歸りなされとことほいだ。廣成の船は翌年の冬歸路に就いたが、歌のやうには歸れなかつた。一行四艘の船がちり〳〵になつて、廣成や吉備の眞備の乘つてゐたのだけが、種子ヶ島に流れ著いた。それでも一行中の他の船の、唐へ吹きかへされたり、崑崙國(今の安南邊でなくても、とにかく南の地)まで漂はされて、囚人にされたりして、足かけ七

うしはく

(一)長崎縣の五島列島の別稱。
(二)本姓は下道朝臣。寶龜六年(一七七五年)歿、年八十三。
(三)鹿兒島縣(大隅國)熊毛郡佐多岬の東南。

(一)舊約聖書の一章。舊約聖書は前にキリスト以前に完成したユダヤ民族の經典で、全三十九卷。

年目に歸れたのよりは、遙かに幸運であつたらう。

當時の人々に取つて天のなせる災害、人智の如何ともし難しとする變に遭易い征途を、古人は言葉もて祝した。我等がよき言をつらねて幸あれと祈れば、しかなるといふのである。

「神、光あれと言ひ給ひければ、光ありき」(一)創世記の第一章のつたへでは、水と空との分れたのも、草木の生じたのも、月日のあらはれたのも、生き物の出たのも、皆神の御言のまゝに、しかなつたのだといふ。さういふ信念が、恐らく方々にあつたのであらう。

萬葉集の十三の卷にも、

しき島の倭の國はことだまの
　助くる國ぞまさきくありこそ

といふ歌がある。これも或は、前の憶良のと似通うたをりの詠かも知れぬ。作者は「瑞穗の國は神ながら言あげせぬ國」と知つてゐても、

(一)八十六卷。谷川士清の著。我が國の古語、俗語、方言などを五十音順に排列して解釋したもの。

なほ言あげして、友の無事ならん事を祈る。言葉にひそむ靈よ、我が祈を納れて、我が言葉を實にせよと希ふ。

旅行く人を送るとて、古人は「うまのはなむけ」をした。(一)「倭訓栞」には「門出を祝ひて途中つゝがなからん爲に、道祖神に手向するなり」と解いてある。多分出發に際して「さきくませ」とか、「はや歸りませ」とか言ほいだのであらう。その「さきくませ」も、「はや歸りませ」も心からの言で、しかあらしめんとする強い祈願であつたらう。「グッドモーニング」、「グッドデー」、「グッドナイト」、何れもたゞの言葉ではない。さうあれかしと希ふのである。希ふが如くなると期待するのである。南無阿彌陀佛と稱へるのに、御名の貴きにすがる念がなからうか。南無妙法蓮華經の唱題も、法華經が尊い故にそれに歸依するとしても、それを唱へるのは、經その物、語その物に威力ありとするのでなからうか。

我等は雨の降らないのに苦しみ、また長雨にも窮する。鎌倉時代の民は、雨を祈るには黑毛の馬を、晴を祈るには白毛の馬を社に奉つたといふ。黑いのは黑雲に寄せた思であり、白いのは白雲に寄せた思であつた。

神垣(一)にひく駒の毛の色みせて
あまぐもきほへ丹生の川上

といふ歌もある。丹生(二)は雨の神を祀つた社である。

新築が落成すると昔は新室ほがひといふ事をした。弘計の王——後の顯宗(三)天皇は、播磨なる縮見の屯倉の首の家で、

……取りゆへる(四)縄葛は、この家長のみいのちの堅めなり。
採りふける草葉は、この家長のみ富のあまりなり。……

とお歌ひなされたといふ。中古には

この殿はうべも富みけりさきくさの

(一)藤原基長の詠。倭訓栞にある。
(二)大和國吉野郡丹生村にある。祈雨の大社。
(三)第二十三代。新室ほがひ
(四)日本書紀清寧天皇の條にある。
(五)催馬樂の歌。

三つば四つばに殿づくりせり

と祝ひ、後の賀茂眞淵は

飛驒たくみほめてつくれるまき柱
たてし心はうごかざらまし

と自ら誓つた。これ等もしかあらん事を望んで、言にあらはしたのである。大殿祭の詞の中に、

「天つくすしいはひごとをもちて、言ほぎしづめまをさく云々」

といふ句がある。これは言葉の靈妙をたゝへて、その力によるといふのである。「天つくすしいはひごと」とは、私どもに「言語は神の人に授け給ひしものなり」といふ說を想はせる。思へば言葉はいみじく、くすしい、これは神業でがなあらうとは、素朴な古人のいづくでも感じてゐた事であつた。

——心のふるさと——

自修文

國語の愛護

五十嵐力[一]

(一)國文學者、文學博士。早稲田大學教授。明治七年(二五三四年)山形縣に生れた。

私は國語を成るべく美しく、味はひのあるやうに、品の高まるやうに發達させたいと思ひます。言葉の美とか味はひとかいふのは、例へば「うまい物を食べた」といふ事を言現す場合に、「うまかつた」「おいしかつた」と言へば、意味はわかるし、文法にも合つて居ますが、たゞそれだけで、人を動かす味はひといふものがないでせう。それを「頬が落ちさうだつた」と言ふと、意味がわかるばかりでなく、一種の面白味がついて來るではありませんか。「途中で遊んで居た」「居睡をした」と言へば、平明であるといふだけですが、「道草を食つて居た」「舟を漕いだ」と言へば、すぐに特別の味はひを感じさせられるではありませんか。これは何の爲でありませうか。色々の理由がありませうけれども、その主な一つは、思ひ寄せた譬喩が奇拔で、しかも妥當(だたう)である爲、もう一つは、一事に二事を疊

妥當　ぴつたりあてはまつてゐること。

み込むところから、簡潔で、同時に含蓄があるやうになる爲であります。古事記天の岩戸入の段に「常夜往(とこよゆく)」といふ文句があります。天照大神が岩戸に御隱れになつたので、永久の夜が續いたといふ事を現した句でありますが、その心持が、この三字五音の中に、何とも言はれず簡潔に、しかも生き〳〵と現されて居る。昨日も今日も、明日も明後日もと、限りなく續く夜でせう。そしてその黑い姿の果てしもない怪物が、のつし〳〵と、限りなく長く進んで行くのでせう。私はかういふ詞の生きた命のある味はひを、つかみたいと思ふのであります。

かういふ例は、外にも澤山ありませう。祝詞の大祓詞(おほはらひのことば)に「底つ岩根に宮柱太敷立(ふとしきたて)て……」といふ句があります。私など幾度も讀みながら、たゞ大家屋建築の爲の誇張的形容とばかり思つて居ましたが、大正十二年のあの大震災の後に、工學博士の伊東忠太氏[一]が耐震家屋の事を說かれた中に、「大昔の祝詞にいはゆる底つ岩

大祓詞　萬民の罪穢を祓ふに爲に誦呪する祝詞。昔は六月と十二月の晦日に、朱雀門で大祓が行はれた。

(一)建築學者。帝國學院會員。東京帝國大學名譽教授。(二五慶三年)山形縣に生れた。

祈年祭（きねんさい）とも言ふ。穀物の豐穰を神々に祈願する祭。
向股（ふと）股。

根に宮柱太敷立てといふのが、建築の理想である。岩を離れた土の上に建てるから、地震に遭ふと一たまりもなく搖りつぶされるので、岩盤の上に建てれば、家全體が岩と一緒に動くから、めつたに潰れるものでない。この岩盤の上に柱を立てる理想的建築法を、大昔の我々の祖先が既に立派に道破し、且實行して居たのである。」と言はれたのを見て、成程と感じた事がありました。また同じ祝詞の祈年祭の中に「手肱に水沫かきたり、向股に泥かき寄せて、取作らん奥つ御年を……」といふ文章があります。泥田の中に腕の附根まで、向股まで入れて、泥土をかきまはして稻を作れといふ意味でありますが、私の或百姓友達が、曾てこの文を見て、「實にえらい事を言つたものである。一體、田の草を除るのは、たゞ草を取るだけの仕事ではなくて、稻の根の生えて居る泥の中へ、空氣と日光とを入れる爲である。だから表面の草を取るだけでなく、かん〳〵といふ烈日に照されながら、煮え立つやうな田に浸つて、水の泡をぶつ〳〵立てながら、十分に搔廻さねばならぬ。この祝詞が、かういふ農作道の極意を、原始的の言葉で簡潔に言現して居るのが、實に面白い」と言つて、感歎した事がありました。かう見ると、國語の力といふものも、なか〳〵えらいものです。昔の言葉や文章だけではありません。日露戰爭の時の戰報に、「舷々相摩す」といふ文句があつて評判になりましたが、これも、「舟端と舟端とが摩れ合つた」といふだけの事で、言現し方によつては何でもないが、「舷々相摩す」といふと、何とも言はれぬ面白さを見せて參りませう。私はすべてかういふ所に意を用ひて、成るべく自分の言葉をも立派にし、仲間、同胞、國民同士の言葉をも立派にしたいと思ふのであります。

芭蕉の俳文の一節に、

「芭蕉はその葉廣うして琴を覆ふに足れり。或はなかば吹折れて鳳鳥の尾をいたましめ、青扇破れて風を悲しむ」

とありますが、これは事實だけを言ふと、芭蕉の葉は幅一尺くらゐ、長さ六七尺もありますが、その廣い長い葉の秋風に吹破られた有樣が、むごたらしいといふのであります。しかし、これだけでは一向につまらないのですが、琴とか、鳳凰の尾羽とか、扇とかいふ美しい、風流な、同時に、いかにも自然でふさはしい譬喩の景物を添へたので、非常に面白くなりました。先づ一尺幅の長さ一間に餘る大きな葉、これで丁度よく覆へる御誂の品物は、十三絃の箏の琴であらうが、「琴を覆ふに足れり」といふと、青い大きい葉が光つて來て、その蔭から耳を魅する音がして來るやうに感ぜられるではありませんか。次には、風に裂かれた樣子ですが、これも最もふさはしい、同時に、美しい鳳凰の尾を以てすれば、あのすんなりとした鳥の王の尾羽を思ひ浮べて、その裂けた傷ましさに涙せしめる味はひが加つて來るでせう。かやうな次第で、見やう考へやうで、一向人の心を惹くにも足らぬやうな事も、好い譬喩

箏の琴　我が國で普通にいふ「こと」。筑紫琴ともいふ。

耳を魅する音　開いてうつとりするやうな音色。

が引かれ、美しい詞が連ねられた爲に、この味はひが、何所から出て來たか、天から降つたか、地から涌いたかと思ふやうな妙味が、出て來たのであります。

かやうに我が國には、最も美しい言葉があつた。今も美しい言葉があります。そして、それは磨けば益〻よくなるべき可能性をもつて居り、また言葉を磨けば國民の生活が美しくなり、國の位が高くなるのでありますから、お互に注意して、國語を守立てゝ行きたいと思ふのであります。我が國は昔から「言靈の幸はふ國」「言靈の助くる國」と言はれました。深く窮めると、言靈の幸はふのは國の幸はふ所以であり、また國の一切事象は、言葉の靈から重大な「たすけ」を受けて居るのであります。國の言葉を正しく美しくするのは、言葉その物の爲ばかりではありません。

――國語の愛護――

(一)第三十八代天智天皇。
(二)藤原鎌足。

七　萬葉集の歌

天皇(一)詔(二)内大臣藤原朝臣、競(ヒマシメタマヒシ)憐春山萬花之艶(ト)、秋山千葉之彩(トラ)時、額田王、以(テ)歌判(ゼシ)之歌

冬ごもり　春さり來れば
鳴かざりし　鳥も來鳴きぬ
咲かざりし　花も咲けれど
山を茂(しゲ)み　入りても聽かず
草深み　取りても見ず　秋
山の　木の葉を見ては　も
みぢをば　取りてぞしぬぶ
そこし恨めし　秋山われは
青きをば　置きてぞ歎く

柿本人麻呂（土佐光起筆）

吉野宮に幸ませる時

柿本人麻呂

やすみしゝ

やすみしゝ　吾が大君　神ながら　神さびせすと　吉野川　たぎつ河内に　高殿を　高知りまして　登り立ち　國見をすれば　たゝなはる　青垣山　山祇の　まつる御調と　春べは　花かざし持ち　秋立てば　紅葉かざせり　行きそふ　川の神も　大御食に　仕へまつると　上つ瀬に　鵜川を立て　下つ瀬に　小網(さで)さしわたす　山川も　よりてまつれる　神の御代かも

山部赤人（藤原信實筆）

反歌

山川もよりてまつれる神ながら

たぎつ河内に船出するかも

望不盡山歌　山部赤人

天地の　わかれし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河なる
富士の高嶺を　天の原　ふりさけ見れば　わたる日の
影もかくろひ　照る月の　光も見えず　白雲も　い行き
はゞかり　時じくぞ　雪はふりける　語りつぎ　言ひつ
ぎ行かん　富士の高嶺は

反歌

田子の浦ゆうち出でゝ見れば眞白にぞ
ふじの高嶺に雪はふりける

思子等歌　山上憶良

瓜はめば　子ども思ほゆ　栗はめば　ましてしぬばゆ
いづくより　來りしものぞ　まなかひに　もとなかゝり

まなかひ

て　安寢しなさぬ

反歌

白金も黃金も玉もなにせんに
まされる寶子にしかめやも

あしびきの山河の瀨の鳴るなべに
ゆづきが嶽に雲たちわたる　柿本人麻呂

いはばしるたるみの上のさわらびの
もえいづる春になりにけるかも　志貴皇子(一)

春の野に霞たなびきうらがなし
この夕かげにうぐひす鳴くも　大伴家持

(一)第三十八代天智天皇の第四皇子。

(一)第三十六代孝德天皇の皇子。
(二)佐保大納言安麻呂の女。旅人の妹。生歿年不詳。
(三)傳不詳。
(四)法成寺。寛仁三年(一六七九年)道長の建立。址は今の京都の東隣。皇宮の
(五)藤原頼通。道長の長子。世に字治關白と言ふ。承保元年(一〇七四年)歿。年八十三。

家にあれば笥にもるいひを草まくら
旅にしあればしひの葉に盛る

有間皇子

こもりくのはつせの山は色づきぬ
しぐれの雨はふりにけらしも

大伴坂上郎女

志賀の海人はめかりしほやき暇なみ
くしげの小ぐしとりも見なくに

石川郎女

八　法成寺の造營

今は御心地例ざまになり果てさせ給ひぬれば、御堂の事思し急がせ給ふ。攝政殿、國々までさるべき公事をばさるものにて、先づこ

(一)藤原道長。

御封
御莊

の御堂の事を先につかうまつるべき仰言宣ふ。殿の御前も、「このたび生きたるは別事ならず、この願のかなふべきなめりと宣はせて、他事なく唯御堂におはします。方四町をこめて大垣にして、瓦ふきたり。さま〳〵に思しおきて急がせ給へば、夜の明くるも心もとなく、日の暮るゝも口惜しう思されて、夜もすがらは、山をたゝむべきやう、池を掘るべきさま、木を栽ゑなめさせ、さるべき御堂々々、方々さま〳〵作りつゞけ、御佛はなべてのさまにやはおはします、丈六の金色の佛を、數も知らず作りなめ、そなたをば北南と馬道をあけて、路をとゝのへ作らせ給ひて、廊、渡殿數多く造らせ給ふに、雞の鳴くも久しく思され、宵、曉の御行ひも怠らず、安きいも大とのごもらず、唯この御堂の事のみ深く御心にしませ給へり。

日々に多くの人々參り罷で立ちこむ。さるべき殿ばらを始め奉りて、宮々の御封、御莊どもより、一日に五六百人千人の夫どもを奉

地子官物

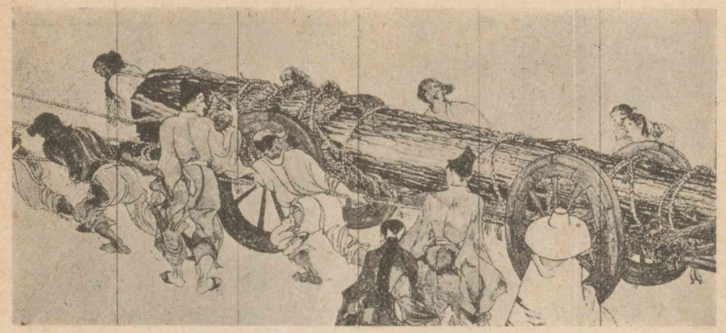
棟　木

るにも、人の數多かる事をば、かしこき事に思したち、國々の守ども、地子官物はおそなはれども、只今はこの御堂の夫役、材木、檜皮、瓦など多く參らする事を、我も〳〵と競ひつかうまつる。大方近きも遠きも參りこみて、品々方々、あたり〳〵につかうまつる。

ある所を見れば、御佛つかうまつるとて、佛師ども百人許並みゐてつかうまつる。同じくは、これこそめでたけれと見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、工匠ども二三百人登りゐて、大きなる木どもには太き綱をつけて、聲を合せて、えさまさと引上げ騒ぐ。御堂の内を見れば、佛の御座作り輝かす。板敷を見れ

とくさ（木賊）

くれ（榑）



（筆　坡　竹　竹　尾）

ば、とくさ、むくの葉などして、四五十人手ごとに並みゐて磨き拭ふ。檜皮ぶき、壁塗、瓦作なども數を盡したり。また年老いたる翁などの、三尺許の石を、心に任せて切りとゝのふるもあり。池を掘るとて四五百人おりたち、山を疊むとて五六百人のぼりたち、また大路の方を見れば、力車にえも言はぬ大木どもに綱をつけて、さけびのゝしり引きもてのぼる。賀茂川の方を見れば、いかだといふ物に、くれ、材木を入れて、棹さして心地よげに謠ひのゝしりてもてのぼるめり。磐石と言ふばかりの石を、はかなきいかだに載せて率て來れど沈まず。すべていろ〳〵さ

まざま、言ひ盡し、まねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舎造りけんも、かくやありけんと見ゆるを、冬の室、夏の風、各こと〳〵なり。

かゝる御勢にそへて、入道せさせ給ひて後は、いとゞまさらせ給へりと見えさせ給ふにも、なほなべてならざりける御有樣かなと、近う見奉る人は尊み、遠う見奉る人は遙かに拜み參らす。今はこの御堂のあたりの木草ともならんと思へる人のみ多かり。そなたざまに赴けば、海の浪もやはらかにたちて、この御堂の物をもて運ばせ、河も水澄みて、快く浮べもて參ると見ゆ。なほなべてこの世の事とは見えさせ給はず。先づは、先年に長谷寺にある僧の、御祈禱をいみじうして寢たりける夢に、大いにいかめしき男の出で來て、「何かかく殿の御事をばともかくも申し給ふ。弘法大師の佛法興隆の爲に生れ給へるなり」とぞ見えさせ給ひける。また天王寺の聖德太子

(一)釋迦在世時代の中天竺舍衛國の富豪。蘇達多とも言ふ。

(二)四天王寺の略稱。

の御日記には、「王城より東に佛法弘めん人を我と知れ」とこそは書きおかせ給ふなれ。何れにても、おろそかならぬ御事なり。

——榮華物語——

九　かぐや姫の昇天　その一

三年ばかりありて、春の初より、かぐや姫月の面白う出でたるを見て、常よりももの思ひたるさまなり。ある人の、月の顏見るは忌むことと制しけれども、ともすれば人間には月を見て、いみじく泣き給ふ。七月の望の月に出でゐてせちにもの思へる氣色なり。近くつかはるゝ人々、竹取の翁に告げていはく、「かぐや姫例も月を哀れがり給ひけれども、この頃となりては、たゞ事にも侍らざんめり。いみじく思し歎く事あるべし。よく〳〵見奉らせ給へ」と言ふを聞きて、かぐや姫に言ふやう、「なでふ心地すれば、かくものを思ひたるさま

うましき世

にて月を見給ふぞ。うましき世に」と言ふ。かぐや姫「月を見れば世の中心細く哀れに侍り。なでふものをか歎き侍るべき」と言ふ。かぐや姫のある所に至りて見れば、なほもの思へる氣色なり。これを見て、「あが佛何事を思ひ給ふぞ。思すらんこと何事ぞ」と言へば、「思ふ事もなし。ものなん心細く覺ゆる」と言へば、翁「月な見給ひそ。これを見給へば、もの思す氣色はあるぞ」と言へば、「いかでか月を見ずにはあらん」とて、なほ月出づれば出でゐつゝ、歎き思へり。夕闇にはもの思はぬ氣色なり。月の程になりぬれば、なほ時々はうち歎き、泣きなどす。これを、つかふ者ども、「なほもの思す事あるべし」とさゝやけど、親を始めて何事とも知らず。

八月十五日ばかりの月に出でゐて、かぐや姫いといたく泣き給ふ。人目も今はつゝみ給はず泣き給ふ。これを見て親どもも、何事ぞと問ひさわぐ。かぐや姫泣く〳〵言ふ、「さき〳〵も申さんと思ひしかども、必ず心惑はし給はんものぞと思ひて、今まですごし侍りつるなり。さのみやはとて、うち出で侍りぬるぞ。おのが身はこの國の人にもあらず、月の都の人なり。それを昔の契ありけるによりてなん、この世界にはまうで來りける。今は歸るべきになりにければ、この月の十五日に、かのもとの國より迎に人々まうで來んず。さらず罷りぬべければ、思し歎かんが悲しき事を、この春より思ひ歎き侍るなり」と言ひて、いみじく泣く。翁「こは、なでふ事を宣ふぞ。竹の中より見附けきこえたりしかど、菜種の大きさおはせしを、我が丈たち並ぶまで養ひ奉りたる我が子を、何人か迎へきこえん。まさに許さんや」と言ひて、「我こそ死なめ」とて泣きのゝしる事、いと堪難げなり。かぐや姫のいはく、「月の都の人にて、父母あり、片時の間とてかの國よりまうでこしかども、かくこの國には數多の年を經ぬるになんありける。かの國の父母の事も覺えず、此所にはかく久しく遊びき

こえてならひ奉れり。いみじからん心地もせず、悲しくのみなんある。されどおのが心ならず罷りなんとする」と言ひて、諸共にいみじう泣く。つかはるゝ人々も年比習ひて、立別れなん事を、心ばへなどあてやかに美しかりつる事を見ならひて、こひしからん事の堪難く、湯水も飲まれず、同じ心に歎かしがりけり。

この事を帝聞し召して、竹取が家に御使遣させ給ふ。御使仰言として翁にいはく、「いと心苦しく物思ふなるは誠にか」と仰せ給ふ。竹取泣く〳〵申す、「この十五日になん、月の都よりかぐや姫の迎にまうで來なる。人々賜はりて、月の都の人まうで來ば捕へさせん」と申す。御使歸りて、翁のありし樣申して奏しつる事ども申す。かの十五日、司々に仰せて、敕使には少將高野大國といふ人をさして、六衛のつかさ合せて二千人の人を、竹取が家に遣す。家に罷りて、築地の上に千人、屋の上に千人、家の人々いと多かりけるに合せて、あける隙もなく守らす。この守る人々も弓箭を帶して居り。母屋の内には女どもを番にすゑて守らす。嫗、塗籠の内にかぐや姫を抱きて居り。翁も塗籠の戸をさして戸口に居り。翁のいはく、「かばかり守る所に、天の人にもまけんや」と言ひて、屋の上にをる人々にいはく、「つゆも物空にかけらば、ふと射殺し給へ。守る人々のいはく、「かばかりして守る所に蝙蝠一つだにあらば、先づ射殺して外にさらさんと思ひ侍り」と言ふ。翁これを聞きて、たのもしがり居り。これを聞きてかぐや姫は、「さし籠めて守り戰ふべきしたくみをしたりとも、あの國の人をえ戰はぬなり。弓箭して射られじ。かくさし籠めてありとも、かの國の人來ば、皆あきなんとす。相戰はんとすとも、かの國の人來なば、猛き心使ふ人よもあらじ」翁の言ふやう、「御迎に來ん人をば、長き爪して眼をつかみつぶさん。さが髪をとりてかなぐり落さん。さが尻をかき出でて、こゝらのおほやけ人に見せて恥見せん」と腹立ち居り。

塗籠
したくみ
さが髪

望の月　吉村忠夫筆

一〇　かぐや姫の昇天　その二

かゝる程に、宵うち過ぎて子の時ばかりに、家のあたり晝のあかさにも過ぎて光りたり。望月のあかさを十あはせたるばかりにて、ある人の毛の孔さへ見ゆる程なり。大空より人雲に乘りており來て、地より五尺許あがりたる程に立ちつらねたり。これを見て、内外なる人の心ども、ものにおそはるゝやうにて、相戰はん心もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓箭を取りたてんとすれども、手に力もなくなりて、なえかゞまりたる中に、心さかしき者、念じて射んとすれども、外ざまへ行きければ、あれも戰はで、心地たゞしれにしれて、まもりあへり。立てる人どもは、裝束のきよらなることもものにも似ず。飛車一つ具したり。羅蓋さしたり。その中に王と思しき人、家に造麿まうで來と言ふに、猛く思ひつる造麿も、ものに醉ひたる心地し

たゞしれにしるものにも似ず

(一)竹取翁の名。

功德

そこらの年比

たゞあきにあく

て、うつぶしに伏せり。いはく、「汝、をさなき人、聊かなる功德を翁つくりけるによりて、汝が助にとて、片時の程とて降しゝを、そこらの年比そこらの金賜ひて、身をかへたるが如くなりにたり。かぐや姫は罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれが許にしばしおはしつるなり。罪の限りはてぬれば、かく迎ふるを翁泣きなげく、あたはぬ事なり。はや返し奉れ」と言ふ。翁答へて申す、「かぐや姫を養ひ奉ること二十年餘りになりぬ。片時と宣ふに、怪しくなり侍りぬ。またこと所にかぐや姫と申す人ぞおはしますらん」と言ふ。「此所におはするかぐや姫は、重き病をし給へば、え出でおはしますまじ」と申せば、その返事はなくて、屋の上に飛車を寄せて、「いざかぐや姫、穢き所にいかで久しくおはせん」と言ふ。立てこめたる所の戸、卽ちたゞあきにあきぬ。格子どもも人はなくしてあきぬ。嫗抱きてゐたるかぐや姫外に出でぬ。えとゞむまじければ、たゞさし仰ぎて泣き居り。

見おこす

竹取心惑ひて泣伏せる所に寄りて、かぐや姫言ふ、「こゝにも心にもあらでかく罷るに、昇らんをだに見送り給へ」と言へども、「何しに悲しきに見送り奉らん。我をばいかにせよとて、棄てては昇り給ふぞ。具してゐておはせね」と泣きて伏せれば、御心惑ひぬ。「文を書置きて罷らん。こひしからんをり〳〵、取出でて見給へ」とて、うち泣きて書くことばは、「この國に生れぬるとならば、歎かせ奉らぬ程まで侍るべきを、侍らで過ぎわかれぬる事、返す〳〵本意なくこそ覺え侍れ。脱ぎおく衣をかたみと見給へ。月の出でたらん夜は見おこせ給へ。見すて奉りて罷る、空よりも落ちぬべき心地す」と書置く。天人の中に持たせたる筥あり。天の羽衣入れり。またあるは不死の薬入れり。ひとりの天人言ふ、「壺なる御薬奉れ。穢き所のもの食し召したれば、御心地悪しからんものぞ」とて、持て寄りたれば、聊か嘗め給ひて、少しかたみとて、脱ぎおく衣に包まんとすれば、ある天人包ませず、

なめげ

御衣を取りいでて著せんとす。その時にかぐや姫「しばし待て」と言ひて、「衣著つる人は心ことになるなり。ものひとこと言ひおくべき事あり」と言ひて、文書く。天人おそしと心もとながり給ふ。かぐや姫「もの知らぬ事な宣ひそ」とて、いみじく靜かにおほやけに御文奉り給ふ。あわてぬさまなり。かく數多の人を賜ひてとゞめさせ給へど、許さぬ迎まうで來て、とりゐて罷りぬれば、口惜しく悲しきこと。宮仕つかうまつらずなりぬるも、かくわづらはしき身にて侍れば、心得ず思し召しづらめども、心づよくうけたまはらずなりにしこと、なめげなる者に思し召しとゞめられぬるなん、心にとまり侍りぬる」とて、

いまはとて天のはごろもきるをりぞ
君をあはれとおもひいでぬる

とて、壺の薬そへて、頭中將を呼寄せて奉らす。中將に天人取りて傳

ふ。中將取りつれば、ふと天の羽衣うち著せ奉りつれば、翁をいとほし悲しと思しつる事も失せぬ。この衣著つる人は、もの思もなくなりにければ、車に乘りて、百人ばかり天人具して昇りぬ。

——竹取物語——

シテ　天人
ワキ　白龍
ツレ　漁夫（二人）

（一）「風早の三保の浦曲をこぐ船の船人さわぐ波たつらしも」（萬葉集、よみ人知らず）
（二）「千里ノ好山ニ雲乍チ歛リ、一樓ノ明月ニ雨初メテ晴レタリ。」（詩人玉屑の句）
（三）「忘れずよ清見が關の波間より霞みて見えし三保の浦松」（續古今集、中務卿）
（四）「風むかふ雲のうき波たつとみて釣せぬさきに歸る舟人」（藤原爲相）

一一　羽衣

ワキ三人一聲謠「風早の、三保の浦曲をこぐ船の、浦人さわぐ浪路かな。

ワキサシ「これは三保の松原に、白龍と申す漁夫にて候。ワキ三人「萬里の好山に雲忽ちに起り、一樓の明月に雨初めて晴れたり。げに長閑なる時しもや、春のけしき松原の、浪たち續く朝霞、月ものこりの天の原、およびなき身の眺にも、心空なる景色かな。下歌「忘れめや、山路をわけて清見潟、遙かに三保の松原に、立ちつれいざや通はん。上歌「風向ふ、雲の浮浪たつと見て、釣せで人や歸るらん。待てしばし春なら

ば、吹くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし。浪は音なき朝なぎに、釣人多き小舟かな。ワキ詞「われ三保の松原にあがり、浦の景色を眺むるところに、虛空に花ふり、音樂聞え、靈香四方に薫ず。これ唯事と思はぬところに、これなる松に美しき衣懸れり。よりて見れば色香妙にして、常の衣にあらず。いかさま取りて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候。

シテ詞「なう、その衣は此方のにて候。何しに召され候ぞ。ワキ詞「これは拾ひたる衣にて候程に、取りて歸り候よ。シテ「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべき物にあらず。元の如くに置き給へ。

ワキ「そもこの衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特に留め置き、國の寶となすべきなり。衣を返す事あるまじ。シテ「悲しやな、羽衣なくては飛行の途も絶え、天上に還らん事もかなふまじ。さりとては返したび給へ。ワキ謠「この御詞を聞く

よりも、愈、白龍力を得、詞「もとよりこの身は心なき、天の羽衣取隱し、謠「かなふまじとて立ちのけば、シテ謠「今はさながら天人も、羽根なき鳥の如くにて、揚らんとすれば衣なし。ワキ謠「地にまた住めば下界なり。シテ「とやあらん、かくやあらんと悲しめど、ワキ「白龍衣を返さねば、シテ「力及ばず、ワキ「せん方も、地「涙の露の玉かづら、かざしの花もしを〳〵と、天人の五衰(一)も、目の前に見えてあさましや。シテ謠「天の原ふりさけ見れば霞立つ、雲路惑ひて行方知らずも。下歌地「住馴れし、空にいつしか行く雲の、羨ましき景色かな　上歌「迦陵頻伽のなれ〳〵し、聲今更にわづかなる、雁がねの歸り行く、天路を聞けば懷かしや。千鳥、かもめの沖つ浪、行くか歸るか春風の、空に吹くまで懷かしや。

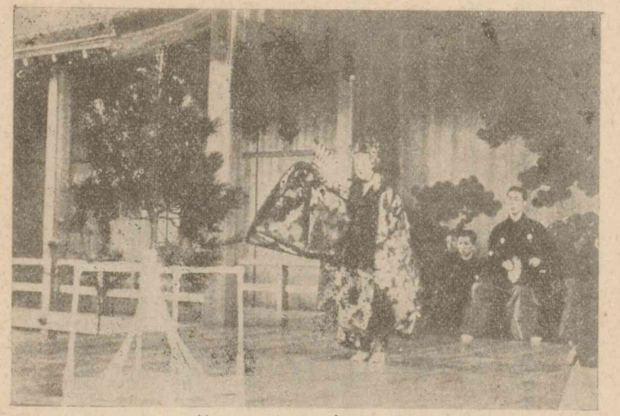
ワキ詞「いかに申し候。御姿を見奉れば、餘りに御傷はしく候程に、衣を返し申さうずるにて候。シテ詞「あら嬉しや、此方へ賜はり候へ。

とやあらんかくやあらん

(一)一は忽萎。頭上天花二は天衣塵垢所著。三は腋下汗出。四は兩目瞬眴。五は不樂本居。

(二)「天の原ふりさけ見れば霞立つ雲路惑ひて行方知らずも」丹後風土記

ワキ「暫く。承り及びたる天人の舞樂、只今此所にて奏し給はゞ、衣を返し申すべし。シテ「嬉しや、さては天上に還らん事を得たり。このよろこびにとてもさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮をめぐらす舞曲あり。只今此所にて奏しつゝ、世のうき人に傳ふべし。さりながら、衣なくてはかなふまじ。さりとては先づ返し給へ。ワキ「いや、この衣を返しなば、舞曲をなさでそのまゝに、天にやあがり給ふべき。シテ「いや、疑は人間にあり、天に僞なきものを。ワキ謠「あら恥づかしや、さらばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ謠「少女は衣を著しつ



羽衣の能

霓裳羽衣の曲

玉斧の修理

(一)「春霞たなびきにけりひさかたの月の桂も花や咲くらん」(後撰集、紀貫之)

(二)「天つ風雲の通路吹きとぢよをとめの姿しばしとどめん」(古今集、良峯宗貞)

つ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ「天の羽衣風に和し、シテ「雨にうるほふ花の袖、ワキ「一曲を奏で、シテ「舞ふとかや。次第地「東遊の駿河舞、この時や始めなるらん。クリ地「それひさかたの天といつぱ、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空は限りもなければとて、ひさかたの空とは名附けたり。シテサシ謠「然るに月宮殿の有様、玉斧の修理とこしなへにして、地「白衣、黒衣の天人の、數を三五に分つて、一月夜夜の天少女、奉仕を定め役をなす。シテ「我も數ある天少女、地「月の桂の身を分けて、かりに東の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。クセ「春霞、たなびきにけりひさかたの、月の桂の花や咲くげに花かづら色めくは、春のしるしかや。面白や天ならで、此所も妙なり天つ風、雲の通路吹きとぢよ。少女の姿しばし留りて、この松原の春の色を三保ヶ崎、月清見潟、富士の雪、何れや春の曙。たぐひ浪も松風も、長閑なる浦の有樣。その上、天地は何を隔てん玉垣の、内外の神の御末にて、月も

(一)「君が代は天の羽衣まれにきて撫づとも盡きぬ巖なるらん」(拾遺集、よみ人知らず)

(二)「笙歌遙聞孤雲上。聖衆來迎落日前。」(大江定基)

(三)「北は黄に南は青く東白西くれなゐにそめいろの山」(紫式部)

曇らぬ日の本や。シテ「君が代は、天の羽衣稀にきて、地「撫づとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌。聲そへてかず〳〵の笙、笛、琴、くご、孤雲の外に充ち滿ちて、落日の紅は、蘇命路の山をうつして、綠は浪に浮島が、はらふ嵐に花ふりて、げに雪をめぐらす、白雲の袖ぞ妙なる。シテ「南無歸命月天子、本地大勢至。地「東遊の舞の曲、シテ、ワキ「あるひは天つみ空の綠の衣、地「または春立つ霞の衣、シテ「色香も妙なり少女の裳裾、地「さいうさ、さいう颯々の、花をかざしの天の羽袖、靡くもかへすも舞の袖。キリ地「東遊のかず〳〵に、その名も月の宮人は、三五夜中の空にまた、滿月眞如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土にこれを施し給ふ。さる程に時移つて、天の羽衣浦風に、たなびきたなびく三保の松原、浮島が雲の愛鷹山や、富士の高嶺、微になりて、天つみ空の霞に紛れて失せにけり。

——謠曲——

一二　春は曙

清少納言[一]

四　季

春は曙。やうやく白くなりゆく、山ぎは少しあかりて紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月の頃はさらなり、闇もなほ螢飛びちがひたる。雨などの降るさへをかし。

秋は夕暮。夕日はなやかにさして、山の端いと近くなりたるに、烏のねどころへ行くとて、三つ四つ二つなど飛びゆくさへ哀れなり。まいて雁などのつらねたるがいと小さく見ゆる、いとをかし。日入りはてて風の音、蟲のねなどいと哀れなり。

冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず。霜などのいと白く、またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわたるもいとつきづきし。晝になりてぬるくゆるびもてゆけば、すびつ、火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

降るものは

雪。霰。みぞれはにくけれど、雪の眞白にてまじりたるをかし。雪は檜皮ぶきいとめでたし。少し消えがたになりたる程、またいと多うは降らぬが、瓦の目ごとに入りて、黑う眞白に見えたる、いとをかし。

時雨。霰は板屋、霜も板屋、庭。

雲は

白き。紫。黑き雲哀れなり。風吹くをりの雨雲。明けはなるゝ程の黑き雲の、やうやく白うなりゆくもいとをかし。

月のいとあかき面に、薄き雲いと哀れなり。

あてなるもの

水晶の珠數。藤の花。梅の花に雪の降りたる。いみじう美しき兒の

(一)平安時代の文學者歌人。清原元輔の女。一條天皇の皇后定子に仕へた。生歿年不詳。

あかる

(一)賀茂祭。
(二)京都市の北部。大德寺邊の舊名。
おどろ

いちごくひたる。樣は非常によい

木の花は

梅濃くも淡くも紅梅櫻の花びら多きに、葉色濃きが、枝細くて咲きたる。藤の花、しなひ長く色よく咲きたる、いとめでたし。卯の花は品おとりて何となけれど、咲く頃のをかしう、杜鵑の蔭にかくるらんと思ふにいとをかし。祭(一)のかへさに紫野(二)のわたり近きあやしの家ども、おどろなる垣根などに、いと白う咲きたるこそをかしけれ。青色の上に白き單がさねかづきたるやうにて、いとをかし。

四月の晦、五月の朔などのころほひ、橘の濃く青きに、花のいと白く咲きたるに、雨の降りたるつとめてなどは、世になく心あるさまにをかし。花の中より實の黃金の玉かと見えて、いみじくきはやかに見えたるなど、朝露にぬれたる櫻にもおとらず。杜鵑のよすがとさへ思へばにや、なほ更に言ふべきにもあらず。

さりともあるやうあらん

あふち(楝)

梨の花よにすさまじくあやしき物にして、目に近く、はかなき文つけなどだにせず。愛敬おくれたる人の顏など見ては、たとひに言ふも、げにその色よりして愛なく見ゆるを、もろこしに限りなき物にて、文にも作るなるを、さりともあるやうあらんとて、せめて見れば、花びらのはしに、をかしきにほひこそ心もとなくつきためれ。さてはなほいみじうめでたき事は、たぐひあらじと覺えたり。

桐の花、紫に咲きたるはなほをかしきを、葉のひろごりざまうたてあれど、また他木(ほかき)どもと、ひとしう言ふべきにあらず。もろこしにことゝ〳〵しき名つきたる鳥の、これにしも栖むらん、心ことなりまして琴に作りてさま〴〵なる音の出で來るなど、をかしとはよの常に言ふべくやはある、いみじうこそはめでたけれ。

木のさまぞにくげなれど、あふちの花いとをかし。枯ればなにさまことに咲きて、必ず五月五日にあふもをかし。

香爐峯

雪いとたかく降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、すびつに火おこして物語などして集りさむらふに、「少納言よ、香爐峯の雪はいかならん」とおほせられければ、御格子あげさせて、御簾高く卷きあげたれば、笑はせ給ふ。人々も皆さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそ寄らざりつれ。「なほこの宮の人には、さるべきなめり」と言ふ。

—枕草紙—

(一)皇后定子の御言葉。
(二)支那の江西省九江縣廬山の北の一峯。
(三)白居易の詩の句「香爐峯ノ雪ヲ撥レ簾看。」

香爐峯の雪（上村松園筆）

一三　須磨の浦波

紫式部

須磨にはいとゞ心づくしの秋風に、海はすこしとほけれど、行平の中納言の關吹きこゆるといひけん浦波、よる〳〵はげにいと近う聞えて、またなくあはれなるものは、かゝる所の秋なりけり。

御前にいと人ずくなにて、うちやすみわたれるに、ひとり目をさまして、枕をそばだてゝ四方のあらしを聞き給ふに、波たゞこゝもとにたちくる心ちして、涙落つとも覺えぬに、枕浮くばかりになりにけり。

琴をすこしかきならし給へるが、われながらいと凄う聞ゆれば、彈きさし給ひて、

こひわびて鳴く音にまがふ浦波は
　おもふかたより風や吹くらん

と歌ひ給へるに、人々おどろきて、めでたう覺ゆるに、忍ばれてあいなう起きゐつゝ、鼻を忍びやかにかみわたす。

(一)在原行平。平安時代初期の歌人。業平の兄。
(二)「旅人の袂すずしくなりにけり關吹きこゆる須磨の浦風」（續古今和歌集卷十）

げにいかに思ふらん、わが身一つにより、親はらから片時たちはなれがたく、ほどにつけつゝ思ふらん家を別れて、かく惑ひあへるとおぼすに、いみじくて、いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらんとおぼせば、晝はなにくれとたはぶれ言うち宣ひまぎらはし、つれづれなるまゝに、いろ〳〵の紙をつぎつゝ手習をし給ひ、珍しきさまなる唐の綾などに、さま〴〵の繪どもを書きすさび給へる屏風のおもてどもなど、いとめでたく見どころあり。人々の語り聞えし海山のありさまを遙かにおぼしやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたゝずまひ、二なく書きあつめ給へり。この頃の上手にすめる千枝(一)、常則(二)など召して、つくり繪仕うまつらせばやと、心もとながりあへり。なつかしうめでたき御有樣に、世の物思わすれて、近う馴れ仕うまつるをうれしきことにて、四五人ばかりぞつと侍ひける。

(一)第六十六代一條天皇の寛弘(一〇〇四年)頃の畫家。
(二)延喜、天曆の頃(一〇一一年)の畫家。

前栽の花いろ〳〵咲きみだれ、おもしろき夕暮に、海見やらるゝ廊に出で給ひて、たゝずみ給ふ御さまのゆゝしう清らなるに、所がらはましてこの世のものとも見え給はず。白き綾のなよゝかなる御衣、紫苑色など奉りて、こまやかなる御直衣に、帶しどけなくうち亂れ給へる御さまにて、釋迦牟尼佛弟子と名のりて、ゆるらかに讀み給へる、また世に知らず聞ゆ。沖より舟どもの唄ひのゝしりて、漕ぎゆくなども聞ゆ。ほのかに、たゞ小さき鳥の浮べると見やらるゝも心ぼそげなるに、雁のつらねてなく聲、梶の音にまがへるをうち眺め給ひて、御涙のこぼるゝをかきはらひ給へる御手つき、黑木の御數珠にはえ給へるは、ふるさとこひしき人々の心ち、みな慰みにけり。

月のいと花やかにさし出でたるに、今夜(こよひ)は十五夜なりけりとおぼし出でゝ、殿上の御遊こひしく、ところ〴〵眺め給ふらんかしと

思ひやり給ふにつけても、月の顔のみまもられ給ふ。(一)二千里外故人心。とうち誦じ給へるに、例の涙もとゞめられず、をり〳〵のこと思ひ出で給ふに、よゝと泣かれ給ふ。夜更け侍りぬと聞ゆれど、なほ入り給はず、

見るほどぞしばし慰むめぐりあはん
月のみやこははるかなれども

その夜上のいとなつかしう昔物語などし給ひし御さまの、院に似奉り給へりしも、こひしく思ひ出で聞え給ひて、(二)恩賜の御衣は今ここにあり。と、誦じつゝ入り給ひぬ。

—源氏物語—

(一)白氏文集、八月十五日夜禁中獨直對月憶元九「三五夜中新月色。二千里外故人心。」とある。

(二)菅家後集、九月十日「去年今夜侍清涼。秋思詩篇獨斷腸。恩賜御衣今在此。捧持毎日拜餘香。」とある。

(三)和銅四年（一一一年）三月古事記撰進の詔を受け、翌年正月成つて奉呈した。後、氏の長者、民部卿となり、養老七年（一三八年）歿した。

一四　古事記よりその一

太安萬侶(三)

伊邪那岐大神詔り給はく、「吾はいなしこめしこめき穢き國に到りてありけり。故、吾は大御身のはらひせな。」と詔り給ひて、筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原にいでまして、みそぎ祓ひ給ひき。

こゝに左の御目を洗ひ給ひし時に成りませる神の御名は天照大御神。

次に右の御目を洗ひ給ひし時に成りませる神の御名は月讀命。

次に御鼻を洗ひ給ひし時に成りませる神の御名は建速須佐之男命。

この時伊邪那岐命いたくよろこばして詔り給はく、「吾は子生み生みて、生みの終に、三柱の貴の子得たり。」と詔り給ひて、即ちその御頸珠の珠の緒もゆらに取りゆらかして、天照大御神に賜ひて詔り給はく、「汝が命は高天原を知らせ。」と事よさし給ひき。故、その御頸珠の名を御倉板擧之神とまをす。

次に月讀命に詔り給はく、「汝が命は夜之食國を知らせ。」と事よさし給ひき。

高天原事よさす

夜之食國

次に建速須佐之男命に詔り給はく、「汝が命は海原を知らせ」と事よさし給ひき。

故、おのも〳〵よさし給へる命のまに〳〵知ろしめす中に、速須佐之男命よさし給へる國を知らさずて、八拳鬚胸前に至るまで哭きいさちき。その泣き給ふ狀は、青山を枯山なす泣きからし、河海はことゞ〳〵に泣きほしき。こゝをもて、惡神の音なひ狹蠅なす皆わき、萬物の妖ことゞ〳〵におこりき。

根之堅洲國

故、伊邪那岐大御神、速須佐之男命に詔り給はく、「何とかも汝は事よさせる國を知らさずて哭きいさちる」と詔り給へば、まをし給はく、「僕は母の國、根之堅洲國にまからんとおもふが故に哭く」とまをし給ひき。こゝに伊邪那岐大御神いたく怒らして、「然らば汝はこの國にはな住みそ」と詔り給ひて、乃ち神逐に逐ひ給ひき。

神逐に逐ふ

故、こゝに速須佐之男命のまをし給はく、「然らば天照大御神にまをしてまかりなん」とまをし給ひて、乃ち天にまゐのぼります時に、山川ことゞ〳〵に動み、國土皆ゆりき。

こゝに天照大御神聞きおどろかして、「我が汝兄の命ののぼり來ます由は、必ず善しき心ならじ。我が國を奪はんとおもほすにこそ」と詔り給ひて、即ち御髮を解き、御みづらにまかして、左右の御みづらにも、御かづらにも、左右の御手にも、皆八尺のまがたまの五百津のみすまるの珠をまき持たして、背には千入の靫を負ひ、五百入の靫を附け、また臂には稜威の竹鞆を取佩して、弓腹ふりたてて、堅庭は向股に蹈みなづみ、あわ雪なすくゑはらゝかして、稜威の男たけび蹈みたけびて、待ちとひ給はく、「何故のぼり來ませる」と問ひ給ひき。

稜威の男たけび

こゝに速須佐之男命のまをし給はく、「僕は邪き心なし。たゞ大御神の命もちて、僕が哭きいさちる事を問ひ給ひし故に、まをしつら

く、『僕は母の國にまからんとおもひて哭く。』とまをしゝかば、大御神『汝はこの國にはな住みそ。』と詔り給ひて、神逐ひ逐ひ給ふ故に、まかりなんとする狀をまをさんとおもひてこそ、まゐのぼりつれ。異しき心なし。」とまをし給へば、天照大御神「然らば汝の心の清明きことは、いかにして知らまし。」と詔り給ひき。

一五　古事記より　その二

速須佐之男命逐はえて、出雲の國の肥の河上なる鳥髮の地に降りましき。このをりしも、箸その河より流れ下りき。こゝに須佐之男命、その河上に人ありけりと思ほして、尋ぎのぼりいでましゝかば、老夫と老女と二人ありて、童女を中にすゑて泣くなり。卽ち「汝たちは誰ぞ。」と問ひ給へば、その老夫「僕は國つ神大山津見神の子なり。僕が名は足名椎、妻が名は手名椎、女が名は櫛名田比賣とまをす。」とまをす。また「汝が泣く由は何ぞ。」と問ひ給へば「我が女はもとより八稚女ありき。こゝに高志の八俣遠呂知なる、年毎に來てくふなる。今それ來ぬべき時なるが故に泣く。」とまをす。「その形はいかさまにか。」と問ひ給へば「それが目は赤加賀知なして、身一つに頭八つ、尾八つあり。またその身にこけ、また、ひすぎ生ひ、その長さ溪八谷、峽八尾をわたりて、その腹を見れば、ことゞにいつも血あえたゞれたり。」とまをす。

かれ速須佐之男命その老夫に「これ汝の女ならば、吾にたてまつらんや。」と詔り給ふに「かしこけれども御名を知らず。」とまをせば「吾は天照大御神のいろせなり。故今天より降りましつ。」と答へ給ひき。こゝに足名椎、手名椎の神「しかまさばかしこし、たてまつらん。」とまをしき。

爾速須佐之男命、乃ちその童女を湯津爪櫛に取りなして、御みづ

(一)今の斐伊川。伯耆國（鳥取縣）と出雲國（島根縣）との境にある船通山に發し、北流して宍道湖に注いでゐる。
(二)船通山の麓の地を言ふ。船通山は古く鳥髮山と言つた。

らにさゝして、その足名椎、手名椎の神に告り給はく、「汝たち八鹽折の酒を釀み、また垣を作り廻し、その垣に八つの門を作り、門毎に八つのさずきを結ひ、そのさずき毎に酒船を置きて、船毎にその八鹽折の酒を盛りて待ちてよ。」と詔り給ひき。かれ告り給へるまゝにして、かく設けそなへて待つ時に、かの八俣遠呂知、まことに言ひしがごと來つ。乃ち船毎におのも〳〵頭を垂れてその酒を飲みき。こゝに飲みゑひて、留り伏しねたり。

乃ち速須佐之男命、その御佩せる十拳劍を拔きて、その蛇を切りはふり給ひしかば、肥の河血になりて流れき。故、その中の尾を切り給ふ時、御刀の刃毀けき。怪しと思ほして、御刀のさきもちて、刺しさきて見そなはしゝかば、つむがりの大刀あり。故、この大刀を取らして、異しき物ぞと思ほして、天照大御神にまをし上げ給ひき。こは草那藝之大刀なり。

故、こゝをもて、その速須佐之男命、宮造るべき地を出雲の國に求ぎ給ひき。こゝに須賀[一]の地に到りまして詔り給はく、「吾こゝに來まして、我が御心すが〳〵し」と詔り給ひて、そこになも宮作りてましける。故、そこをば今に須賀とぞ言ふ。この大神、初め須賀の宮作らしゝ時に、そこより雲立ちのぼりき。かれ御歌よみし給ふ。その御歌は、

やくもたつ　出雲やへがき　つまごみに
やへがきつくる　そのやへがきを

一六　古事記を通じて見た我が祖先の生活

相馬御風[二]

我々の祖先の最も力ある生活を後世の我々に示す物は、ひとり古事記並びに日本書紀あるのみである。殊に古事記にあつては、徹

(一)島根縣大原郡海潮村の字。

(二)詩人、評論家。名は昌治。明治十六年(一八五四年)三新潟縣に生れた。

頭徹尾、潤飾なき日本民族その物の生活の記錄である。その史實上の價値はどうであらうとも、とにかく我等の祖先の生活全體が、かの古事記一卷に表象化されてゐる事だけは、疑ふ譯には行かぬ。そして我々日本民族の生活史の殆ど全部を包んでゐると言つてもいゝ程な、かの佛儒二教の空氣の全然混じてゐない我が民族の記錄は、唯この古事記あるのみである。この點に於て、我が日本民族に取つて最も尊い、そして最も廣く、最も深く讀まれ味ははるべき書物は古事記である。古事記は實に、我等日本民族の生活の源であると思ふ。

古事記を讀んで我々の最も感ずるところのものは、唯偏に生きんとする人間の力である。あらゆる物を自己の生活に統一しようとする努力である。彼等は人間の生活を離れた自然を觀なかつた。彼等は人間を離れた神を認めなかつた。彼等の觀た自然は人間生

うつくし

活の一部で、彼等の認めた神は人間の生活力の象徴であつた。彼等の身に纏ふべき衣服の材料を彼等に供給する蠶も、彼等の生活を繫ぐべき稻も、粟も、小豆も、麥も、大豆も、皆悉く彼等と同じ人間の肉體から分化して出た物と觀た。それ程までに彼等は人間の生活を擴大してゐた。彼等の眼中には、人間の運命の最後は死でなくして、發展窮りなき生であつた。死の國にある伊邪那美命が、「うつくしきあがなせの命、汝が國の人草、一日に千頭絞り殺さん」と言はれたのに對して、生の國にある伊邪那岐命は「うつくしきあがなもの命、汝さし給はゞ、我はや一日に千五百產屋立ててん」と答へられた如きは、最もよくその間の消息を傳へてゐるではないか。殊に古事記一卷を通じて、熱烈な生の力が飽くまでも死の力と戰つて、それにうち勝たう、それを脫出ようと悶えてゐる事實が、到る所に書かれてゐる事は、最も注目すべき事である。後世の日本人に見るが如き、死

に對してひたすら悲しむやうな態度は少しも見えない。死に對して悲しみ歎き、はてはあきらめるやうな事は、我等の祖先にはなかつた。彼等の死に對して悲しみ歎く感情は、常に一轉して死に對する憎惡の念となり、挑戰の力となつた。彼等は死といふ事實に對して、あきらめる代りに戰つた。彼等はいかなる境遇にあつても、常に生きん事を欲した。生きようと努力した。彼等の生の欲求は、死をも生と變へなければ止まなかつた。

次に我等祖先の神は、人間の生活力の象徴である。實際我々の祖先ぐらゐ、何にでも神といふ尊稱をつけた民族は他にない。さうかと言つて、他の未開の民族に見るやうな多神的でもなく、野蠻な自然物崇拜でもない。神はすべて人間であつた。威力を有する人間が卽ち神であつた。隨つていはゆる敬神の念には、救濟を祈るやうな分子はなかつた。敬神は唯肉身の源、生命の源たる祖先に對する崇拜に過ぎなかつた。神を以て人間に對する絕對的の主權者とは思はなかつた。敬神は强大な人格に對する讃美と、自己の生命の源に對する讃美とに外ならなかつた。祈念はまた常に幸福本位であつた。我を捨てて神にすがると言ふよりは、我の生活の幸福に對する神力を希ふに外ならなかつた。要するに、神は生活の主權者ではなくして、自己の生活力の擴大された象徴に過ぎなかつた。この生の發展、生の擴大といふところに鞏固な基礎を有する我等の祖先の敬神觀念は、他面に於て、その念力に逆ふところの物の衰滅を信じた。

偏に生活の發展と擴大とを意志とした我等の祖先の生活は、隨つてまた非常に努力的なものであつた。境遇に屈する事を知らぬその生活は、常に意志その物の悲劇であつた。我が國の文藝的產物で、悲痛な生活意志の發現を見得る物は、古事記を措いて他にない

と言つてもよいくらゐである。この點に於て最高な意味の悲劇的人格は、我が國の歷史中、古事記以外にはこれを求め得られないと思ふ。

古事記中に書かれた數多の悲劇的人物の中で、最も我々の心を引くのは日本武尊である。尊はいかなる難事をもし遂げて、自分の力を發展させようとされた。自分の事業の爲には、最愛の后弟橘比賣命をも眼前で犧牲とするに躊躇されなかつた。それでゐながら、なほ尊はその妻を慕うては、「阿豆麻波夜」の歎聲を禁じ得られなかつた。

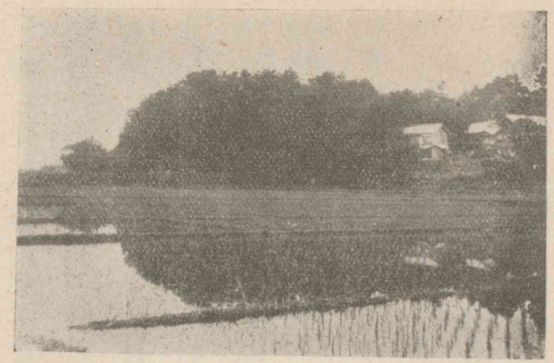
かくて尊はあらゆる困難と戰ひ、あらゆる危險を冒して、東北地方平定の大任を一歩々々に果された。自己の苦しい境遇を知りながらも、なほ自己の努力を惜しまれなかつた。しかし、その運命は遂に不幸なものであつた。いかなる强敵に對しても挫けられなかつた尊も、病氣には敵し得られなかつた。東北討伐の大業を果して都へ歸られる途上、尊は終に伊勢でこの世を去られてしまつた。「我が心、恆は虛をも翔り行かんと念ひつるを、今我が足え歩まず、當藝斯の形に成れり」といふ尊の御歎聲には、實に悲壯な響が籠つてゐる。歩一歩に疲れて衰へ行く病軀をよろめき運びながら、絶えず故郷なる大和の國をこふる歌を歌はれた。歌ひながら終に斃れられた。

就中

いのちの　またけんひとは、
たゝみごも　へぐりのやまの
くまがしがはを、うずにさせそのこ。

といふ歌の如きは、最もよく尊の生を愛せられる心の熱烈であつた事を示してゐる。身は逆境にあつて、旅に斃れようとしながらも、なほ且「命の全からん故郷人よ、汝等の命の全からん限りは、隱白檮

の葉を頭に飾つて、樂しく面白く遊べ」と歌ふ。これを後世の死を悲しみ、運命を恨む數多の人々の歌と比べてみると、當時の人々の生活に對する心持の、いかに積極的であつたかに驚かれるではないか。



能褒野墓

更に驚かれる事は、日本武尊が薨去の後、大きな白鳥と化して、所定めず、行方知れず、天翔り行き給うた事である。御子たちが哭き叫びながら慕ひ追ふのをも顧ずして、かの大きな白鳥は野より海へ、海より山へ、山より海へと、天翔り〳〵し、最後はその行方をも知られなかつた。白鳥の止る毎に造られた幾つかの御墓は、遂に日本武尊が最後の住所ではなかつた。御墓はすべて空虛な外形のみで、日本武尊その人の生命は、遂に止る所を知らなかつた。發展窮りなき日本武尊の生命は、結局墓を脱れ〳〵て、生ける白鳥となつて天翔り行く生命であつた。

この日本武尊の生涯のやうに、雄々しい努力に充ちた生活は、我が國の歴史に於ては、殆ど他に求められない。日本武尊の生涯は、一刻も休なき努力の生涯であつた。

いかなる境遇にあつても、尊の强烈な生活力は、常に外に向つて發展した。この偉大な生活の發展力の向ふ所、尊はいかなる敵とも戰ひ、いかなる敵をも倒さねば止まなかつた。尊は自ら知れる逆境裡にあつて、死に瀕しながらも、なほ聲を揚げて生を讃美する歌を歌つた。尊は死してもなほ墓の暗闇を脱れて、天翔り天翔つた。かくの如く最後までも熱烈な生の力の充ち滿ちた生涯が、我が國の文藝的産物中、古事記を措いて他のどこに見出し得られようか。尊を

通じて感ぜられる我等の祖先の生活その物に對する心持が、いかにも我々には慕はしいのである。人間の生活意志その物の悲痛な發現は、我が國の藝術的產物中、ひとり古事記に於てのみ見られると思ふ。

外に向つて最近著しい國家的發展をなし來つた我が日本民族は、內的方面にもまた最近著しく革新的徑路を歩みつゝある。無論それには外國思想の影響が多分にあるのだが、しかし、大體から見て、從來の消極的思想に對する新たな積極的思想の勃興と見て差支なからう。長い年月の間續いて來た我々民族の消極的生活に對する新しい生活欲の勃興、その生活全體の革新の過渡期、それが現今の我が文藝界を中心とした思潮の狀態ではなからうか。かう考へてみて、更にかの古事記時代に於ける我々祖先の積極的生活の空氣を味はつてみると、我々には一種堪難い憧憬の念が涌くのを覺える。

——黎明期の文學——

一七　上代耕人の生活

武田祐吉[一]

草昧の土地を開拓して一處定住の計を建て、耕人生活の基礎を築いて行つた古代日本民族の進路は、蓋し平易ではなかつたであらう。今日この方面を考察すべき資料として、比較的多くの分量を有するのは風土記である。風土記は元明天皇の和銅六年[二]の詔敕によつて成つたものと認められ、諸國に於ける古老の傳說、土地の狀態、產物の品名等を錄したものであるが、多くは散佚して、現存してをるのはその一部分に過ぎない。今主としてこれ等の現存せる風土記を材料として、上代耕人生活の一面を描いてみようと思ふ。

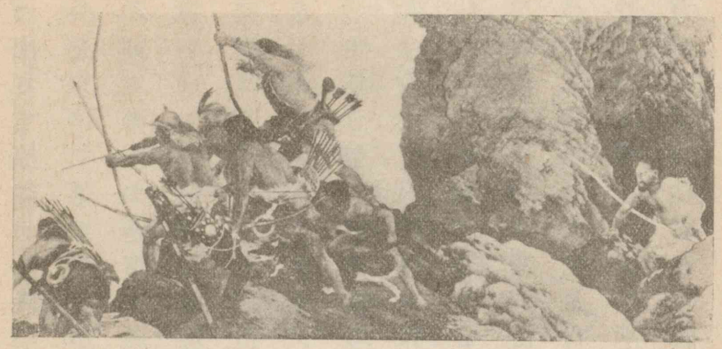
野性に富んだ河川は、自由に奔放に原野を潤して流れてゐる。雨降れば卽ち溢れて、恣にその河床を更める。見渡す限り廣茫たる平

(一)國文學者、文學博士。國學院大學教授。明治十九年(一五四六年)東京市に生れた。
草昧
(二)第四十三代。
(三)一三七三年。
散佚する

(一)「ゆだね蒔く小田を求めんと足結出てぬれぬこの川の瀬に」(萬葉集、卷七)

(二)「次に國わかしく浮脂の如くして、海月なす漂へる時に、蘆牙のごと萌騰る物により成りませる神云々。」(古事記、上卷)

野には、蘆が一面に生えてゐて、秋風に白い穂波が重く靡いてゐる。春されば人々は足結(一)をぬらしつゝ、蘆牙(二)の萌騰る水のほとりに、新しい地を求めて新墾田を拓いた。稻はもと野生せずして、海のあなたから耕作法と共に將來されたといふ事であるが、この島の氣候地味は、これが生育に好適して、おのづからにして成れる百枝の稻を獻つた事もある。苗代を作るに草を敷くのは肥料の爲であつて、普通に行はれた事と思はれるが、或は生きた鹿を捕り臥せて、その腹の血に稻を植ゑたとも傳へてゐる。かくして田を作るに必要な水を爭ひ、おのが田へ溝を作り樋を通して水を誘ひ、これが爲に鬪爭の起る事もあつた。蘆原の地はもとより濕潤であつたから、其所には蛇類が夥しく蕃殖してゐた。これを開墾して新耕の地とする事業の前には、住居を奪はれんとする蛇類との葛藤が起つた。古代の說話に蛇類に關するものの多い所以である。蛇身で頭に角のあ



上代人の戰（小村大雲筆）

る夜刀の神が、相群れ來つて耕作を妨げ、或は池邊のしひの樹に昇り集うて、時を經ても去らなかつたと言ひ、また大蛇が多かつたので大神の地名を殘した所もある。

新耕の人々を妨げたのは、獨り蛇神に止らなかつた。豐蘆原の中つ國を、千五百秋のうまし國と占ひ定めて移住した人の、干戈を執つて直接に鬪はねばならなかつたのは、其所の先住民である。彼等は國栖とも、土蜘蛛とも、八掬脛とも呼ばれた。彼等は土を掘つて穴居し、また石堡を作つて住んだ。人が來れば竄れ、人が去れ

招慰

占據

ば出でて掠盜した。風俗を異にして招慰される事がなかつたので、兵を擧げて擊つた事が史籍にも多く出て居り、また記錄されない私鬪も多かつた事と思はれる。しかし、中には御贄を獻つて歸順の意を表し、人形馬形を作つて神を祭る事を敎へ、賢し女と稱へられた者もあつて、これ等はやがて融合同化して、日本民族の一成分をなした。

住むべき土地を求めて、これの島根に土著し蕃殖して行つた人人は、先住民と戰つた外にも、自分たちの間にも爭ひ、また後から移住を企てて來た者とも爭つた。耕作すべき地、殊には豐穰の地を爭ひ、收穫をも爭ふやうになつた。土地を占據するには、先づ到つた者が標を結ひたてて占有の意を表すのであるが、或は高所に立つて黑葛を投げ、その落ちた所を己が地と占める事もあつた。しかも暴力を以て他鄕の人の蒔いた農作を奪つて刈り藏め、また他鄕の人

攪拌する

御年の神

を襲つて、その耕した地を取らうとした事もあり、百八十の村君が村毎に相鬪ひ、また大軍を率ゐて海を踰え土地を求めて渡來もした。客人の神が劍をもつて海水を攪拌し、これを宿としてその威力を示したり、谷を奪ひ合つて、曲つた葛の如き形にしたりした。

蘆原の地は勞せずしてもとより豐かであつたけれども、なほ神神の荒びを恐れる人々は、御年の神に白馬、白猪、白雞を獻つて、八束穗の茂し穗に、奥つ御年の榮えん事を祈り、水口の神を祭つて齋種を下すのである。そして五風十雨、時により過ぎるのを歎いては、御馬に御鞍を具へて、龍田の神、水分の神を祭る。幸ひに秋の收穫になれば、飯にも汁にも、初穗を百取の机に置きたちはして皇神の御前に獻り、殘をば家の長が祝つて、新嘗の祭をする。この祭は極めて神聖な祭典であつて、固く忌み戸を閉ぢて、外來者は親しき者と雖も入る事を許さない。

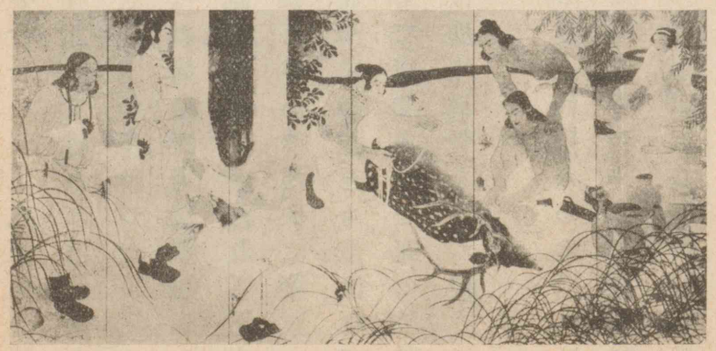
瘴癘の氣

祭をするのは、單に農作に關する事ばかりではない。すべての荒ぶる神を祭り鎭め、諸の汚穢不淨を祓ふ爲に行はれた。山を越えて行く路には、殊に荒ぶる神の住んでゐる事が多かつた。その神の正體には、目に見えぬ瘴癘の氣もあつたであらう。漂流し來つた異種の人もあつたであらう。世を遁れて浮浪人となつた類もあつたであらう。鷲に化けた鰐だと傳へてゐる所もある。その荒ぶる神の障り坐す道路を行く人は、十人のうちに五人は殺され、五人がうちに三人は斃された。荒ぶる神を祭り鎭めて、行旅を安らかにする爲には、佐比の祭が行はれた。

かやうな祭の場こそ、古代日本文學の發祥の地であつた。上代の祭典は、人々が歌舞に熱してゐる間に、天から神が降つて、神主によつて神語を下すを本體とした。神語は莊重で威力のある文であり、歌謠は豐麗で興趣の多い詞である。これがそれ〴〵の道を進んで

生育して行つたのであつて、各種の文學の源を成してゐるのである。

上代耕人の生活に最も親しかつた野獸は鹿であつた。山田を作れば、自ら庵を作つてその害を防がねばならなかつた。田の主が柵を作つて待ち、鹿が來て頭をさし入れて苗を食つたのを、捕へて頸を斬らうとしたら、命を助けてくれたなら、子々孫々に至るまで苗を食ふ事のないやうにしようと誓約を立てたので、赦してやつた。それより以來、その田の苗を鹿の食ふ事がなかつたといふ傳說も殘つてゐる。或は攝津國の鹿が、背中に雪が降



上代人の生活（町田曲江筆）

つた、また薄が生ひたと夢見て、その妻が、夢合をして凶兆であつたのに拘らず、淡路の島へ海中を泳ぎ渡らうとして、船人に遭つて射殺された話などを傳へてゐる。古へ野に立つ鹿の多かつた事は、(一)その擎げたる角は蘆の枯れたる原の如く、その氣吹は朝霧の如し」といふ文のあるに見ても知るべきである。鹿が來て鳴いたり舌を出したりした事に因つて、地名とした所も甚だ多かつた。殊に蘆原の鹿は、その味が苦くて、食ふに山の宍に異なつてゐたとも言はれてゐる。かくして古代狩獵の目的物は、主として鹿であつた。鹿の肢體は大部分衣食に用立てられ、また太卜(ぶぼく)には、鹿の肩骨をうつ拔きに拔いて、これを燒いて吉凶を卜した。

これ等農耕に、狩獵に、寧ろ自ら恣であつた上代耕人の生活には、愉快な半面も決して少くはなかつたのであらうが、一面には常に私鬪の爲に備へてゐなければならなかつた狀態にあつたと思は

(一)日本書紀卷七に見える。

れる。これ等の割據的な大家族主義の生活の上に、やがて國家は發達して、一切を包容するやうになり、茲に始めて人々は眞の平和を樂しみ得るやうになつて行つたのである。

一八　上代の祭祀と祝詞

次田潤(一)

我が國の國體が世界に冠絕してゐる事は、今更言ふまでもないが、かゝる國體を生じ、しかも三千年以來聊かの動搖をも見なかつたのは、畢竟、敬神崇祖の國民性が、その基礎となつてゐるからである。隨つて、國體の淵源を知り、また萬古不易であるべき所以を明らかにするには、先づ上古に遡つて、敬神思想の發達の狀態を考察しなければならぬ。

上古に信仰された神の範圍は極めて廣汎に亙るのであるが、その重要なものは祖先神と自然神とである。上古の民族は、人間の肉

(一)國文學者。第一高等學校教授。明治十七年(二五四四年)岡山市に生れた。

體には、生活を營み生命を保持する靈魂が宿つてゐると考へ、しかも肉體が死滅した後も、永久に存續するものであると信じてゐた。祖先神は卽ち死んだ祖先の靈魂であつて、死後もなほ、天翔つてその子孫の無事幸福を護るものであるとの信念によつて、崇拜されるのである。また自然神は、原始的には天地、日月、風雨、山川、草木の如き自然物を、超人間的存在として、眼に映ずるまゝを崇拜したのであるが、後には自然物に內在し、またはこれを司どる神靈を日常生活の守護神として、崇拜するやうになつたのである。

我が國民の敬神思想の發達の根本となつたのは祖先崇拜である。祖先崇拜は、父母の靈魂を敬愛する情念の延長によつて起るのであるから、崇拜の對象として最も重きを爲すのは、氏族の祖先神である。しかし、氏族が代々尊信し來つた自然神は、崇敬者との關係が親密の度を加へると、屢、その氏族の祖先神となる事があり、また氏族と氏族とが結合し融合すると、もと有力な一氏族から崇敬を受けた神が、自然新たに共同の祖神として崇拜されるやうになるのである。更にこれを擴張して考へる時は、全民族の統一が成つた後に、皇室の御祖神が全國民の大祖神と仰がれ、また國土の經營や國家の統一に功績のあつた氏族の祖神が、國民一般の崇拜を受けるやうになつた因緣も、またおのづから明瞭である。かくて祖先神を祭る事によつて、氏族の親愛なる團結が成り、更に皇祖天照大御神を尊崇する事によつて、皇室を大宗家とする國民全體の神聖なる結合が成つたのが、我が建國の體裁であつて、祭祀卽政治である所以も實に是にあるのである。

古事記、日本書紀などには、祭祀の古俗を窺ふ事の出來る神話傳說が極めて多いが、中でも最も代表的なものは、天岩戸の神話である。我々はこの神話によつて、上代人の敬神思想に二方面のあつた

儀容

事を窺ふ事が出來る。その一は、尊嚴な皇祖神が一たび神德の發揚を止め給ふと、忽ち惡神が跋扈跳梁して、萬づの災が涌起り、世は全く暗黑となると信ぜられた事であり、他の一は、盛大な祭祀を營んで皇祖大御神の神意を慰め奉り、その偉大な神威の輝きを待つて、始めて一切の災禍は掃ひ清められ、國土は元の光明世界となると信ぜられた事である。我々はまたこの神話によつて、上古に行はれた國家的祭祀の儀容をも知る事が出來る。卽ち善美を盡した幣帛を奉り、美辭を列ねた祝詞を白し、また神意を慰め和げる爲に神樂を奏する事が、太古以來の祭の三大行事であつたのである。

祭祀はもと、貴人若しくは尊屬に仕へる心情の擴充によつて營まれるのであるから、國家的祭典に於て神の心を慰め喜ばしめる爲に、國民が最善を盡すのは當然である。卽ち神前に供へる御饌には、御酒をはじめ、河海山野に生ずる產物の限りを盡し、神御衣の料

には明妙、照妙、和妙、荒妙の品々を奉り、幣物若しくは神寶としては鏡、玉、劍、矛、盾、弓、矢などを捧げ、また神樂には歌舞音樂の粹を集めるのであつて、我が國の上代文化は、祭祀を中心として發達したと言つても過言でない。かくて祭祀の諸儀式には、上代國民の敬神思想が具體的に表明されてゐるのであるが、祭祀の本義を遺憾なく表現してゐるのは祝詞である。

祝詞はもと言靈の信仰から發生したのである。上代人は、言語には神祕的な靈力が宿つてゐて、それが人間の吉凶禍福を支配するものであると信じてゐた。これを言靈信仰と言ふ。卽ち、めでたい詞を唱へれば、その詞の言靈の作用によつて幸福が得られ、反對に、凶言を發てば、己の忌嫌ふ者に、その詞通りの凶事を招く事が出來ると信じたのである。萬葉集に我が國を「言靈の幸はふ國」と言ひ、また「言靈の助くる國」と歌つたのは、言靈の働によつて繁榮する特殊の

國がらであるといふ信念を現したものである。然るに不吉な詞を發つ事は、自他共にこれを忌み、漫りに口にしないのが人情であるから、その詞は簡短なのが普通であるが、めでたい詞は我も人もこれを聞く事を喜び、その詞が美しければ美しい程、また長ければ長い程、滿足を感ずる道理であるから、この方は漸次發達して、遂に上代の民族的文學の一としての祝詞となつたのである。かくて祝詞はその源を太古に發してゐるのであるが、上代の祝詞で後世に傳へられたものは、延喜式[一]の二十七篇と、台記[二]の別記に採られた中臣壽詞一篇とである。これ等の中には、平安朝初期に作られた新しいのもあるが、最も古いのは、飛鳥藤原朝の頃に成つたであらうと思はれるもので、これ等には上古の祝詞の面目が遺存してゐる。

祝詞は祭祀に應じて述ぶべき趣旨を異にするのであるが、延喜式のは何れも公の神事に用ひられたものであるから、その祈請す

(一)五十卷。藤原時平等の撰。朝延年中の諸儀式、百官臨時の作法、諸官中の事務その他國々の恆式等を漢文で詳記したもの。

(二)十四册。藤原頼長の日記で、第七十六代近衛天皇の康治元年（一一八〇）から久壽二年（一一八五）に至る十四年間の記錄である。

福祉

るところは、主として皇室の安穩長久と、國家國民の繁榮幸福とである。卽ち主要なものに就いて言へば、中臣壽詞、出雲國造神賀詞の如きは、御代の長久を祝賀するものであり、大殿祭、御門祭、鎭火祭、道饗祭、遷却崇神詞の如きは、宮殿若しくは帝都の無事安穩を祈るものであり、祈年祭、月次祭、廣瀨大忌祭、龍田風神祭などは、穀物の豐穰を祈請するもの、また大祓は、皇族をはじめ群臣百官以下、天下萬民の罪穢を祓ひ淸めて、國家の安穩、國民の福祉を期待するものである。以上擧げた諸篇は、比較的古い時代に成つたものであるから、大體に於て上古の祝詞の特質を保存してゐるが、殊に注意すべきは、新しい祝詞が主として祈願の詞から成つてゐるのと違つて、冒頭に天孫の降臨や大國主命の國讓などの、建國神話を述べてゐるもののある事である。これは神代の吉例を引いて來て、現在の祈請の實現を保證すると共に、聽く者をして、或は祖先の勳業をしのばせ、

或は偉大な神德を仰慕させる效果がある。

上代の祝詞は、善言美辭に宿る言靈の働によつて、神及び人の心を感動させる事を主眼とするのであるから、國民がその文辭に文學的技能を傾注したのは當然である。然るに祝詞の組織は略一定して居り、祈願の趣旨も概ね簡單であるから、伎倆は內容の上に揮はれるよりも、寧ろ形式の方面に注がれた。卽ち祝詞の文章の特色としては、力めて抽象的な語句を連ねて、漠然とした廣大な感を起させるやうにし、また語を重ね句を疊んで、冗長のうちに悠揚たる風格を備へ、懇切鄭重を極めるやうにしてゐる。例へば、類似の語を反覆連用して、「平らけく、安らけく」「祓ひ給ひ、淸め給ひ」と言ひ、對語、對句を用ひて「惡しき風、荒き水」「下つ磐根に宮柱太知り立て、高天原に千木高知り」と言ひ、また物を列擧して「大野原に生ふる物は甘菜、辛菜、靑海原に住む物は鰭の廣物、鰭の狹物、奧津藻菜、邊津藻菜」といふ

類である。反覆、對句、列擧は祝詞の修辭の重要なものであつて、これが爲に一篇の文章が森嚴莊重の風を帶び、また聲調が流麗爽快になるのである。左に揭げる一節の如きは、文辭の莊麗、格調の整美の外に、なほ一言一句の上にも進取發展の氣象が躍動してゐて、上代國民の雄大高遠な抱負を見る事が出來る。

伊勢にます天照大御神の大前に白さく、皇神の見はるかします四方の國は、天の壁立つ極み、國の退立つ限り、靑雲のたなびく極み、白雲の墜り坐向伏す限り、靑海原は棹柁干さず、舟の艫の至り留る極み、大海原に舟滿ちつゞけて、陸より往く道は荷の緒縛ひ堅めて、磐根、木根履みさくみて、馬の爪の至り留る限り、長道間なく立ちつゞけて、狹き國は廣く、峻しき國は平らけく、遠き國は八十綱うちかけて引寄する事の如く、皇大御神の寄さし奉らば、荷前は皇大御神の大前に、橫山の如くうち積み置きて、殘をば平ら

けく聞しめさん。（祈年祭）

祝詞の文章はかくの如く單調であり、純朴であるが、少い語彙を反覆重疊して、何等の省略をしない所に、謹嚴莊重の感が起るのであり、また祭典の儀式と一致する妙味があるのである。

要するに、敬神の思想並びに祭典の儀容は、文化の發達するに隨つて變遷發達を見たのではあるが、祭政一致の國風は、今もなほ皇室並びに伊勢大神宮をはじめ、全國の神社で營まれる祭典に、儼然として保存されてゐて、吾々はその清淨で森嚴な祭式を見、また莊重で悠揚たる祝詞を耳にする時、身は現實の世を離れて、遠き神代の祖先の前に侍する思がするのである。かくて我が國民は崇高謹嚴な祭祀の庭に集ふ時、眞に國民的感情が高潮に達するのであつて、この感激は卽ち、永久不變の國體を維持する原動力となるのである。

自修文

上古史を讀んで

我が國最舊の典籍は、元明天皇の和銅五年に太安萬侶が撰進した古事記三卷と、それから八年の後、元正天皇の養老四年に舍人親王が撰修された日本紀三十卷とである。これをエジプト、支那若しくはギリシャ、ローマなどの古書と比べて、時代に於て必ずしもその舊きを誇る事は出來ない。しかしながら、この記紀の二典が撰進された時代より更に幾百年前から引續いて存在して居る帝國、しかも萬世一系の皇室を戴いて、國運の益〻伸張して行く國家は、全く世界に比倫を見ないのである。我が國開闢以來の事を敍述したこの二典によつて、我等は遠く建國の當初に遡つて、我等の遠つ祖の精神をも讀み得るのである。

二典の記事は神代に始つて居るが、永く文字のない時代を口から口へ傳唱された爲、またその言語に譬喩や神祕的な言廻し

荒唐不稽　確實な根據もなく、何等の考もなしに說くこと。

宇宙創造說　宇宙開闢論に就いての一說。宇宙は自然に生成したものでなく、神によつて創造されたとする說。

天地が別れてから云々　古事記によれば、伊邪那岐、伊邪那美の二神は先づ天之御柱を中心として、天御柱、國御柱の二神に命ぜられ、次に國土を固定の事業に從ひ給ひ、大八洲の島々、即ち今の淡路、四國、隱岐、九州、壹岐、對馬、佐渡、本州をお生みになつた。次ぎに遊ばれた。吉備の兒島、小豆島、大島、女島、知訶島、兩兒島などの神々をお生みになり、風、海、水、五柱の神をお生みになつた。三十の島々を生み遊ばされた。その後、伊邪那岐の命は黃泉の國からお歸りになつて、天照大神を生み給うたのである。

の多い爲、または實際の史實ばかりでなく、幾分か空想から產出された傳說を交へて居る爲、今日の科學的見解では合點の行かぬ事が少くない。且また今日の歐米各國にはかやうな古代史のない爲に、世人には往々我が神代史を荒唐不稽なものとして顧ない傾がある。こは實に淺薄皮相な考であつて、我等は一見荒唐不稽と見えるこの古典中から、我が建國の精神をも見出し、我が國民性の本質をも窺ひ知らねばならぬのである。否これ等の古典に現れた我等の祖先の精神は、やはり今日の國民の腦裡に宿つて、國家の昌運を導きつゝある事を知らなければならぬ。

我が神代史は我が國家の成立、皇室の由來を說くのが主で、宇宙創造說などを述べるのが本旨ではない。それ故、外國の事などには何等の接觸もなく、ひたすら我が日本帝國の成立に就いて說いてある。天地が別れてから、伊邪那岐、伊邪那美の二神は先づ我が日本の國土を產ませられる。大八洲の島々を始めとして、幾

多の小島を產ませられる。續いて風の神、水の神、野の神、山の神、火の神などを產ませられる。それから最後にこの國土に君臨すべき神をといふので、天照大神がお生れになり、それが高天原にお上りになつて、その御子孫が、この葦原の中つ國即ち大日本國を知ろしめす事になるのである。この神話の底に潛んで居る思想は何か。國土と皇室とが御兄弟の關係になつて居るといふ事は、國土と皇室との離れる事の出來ないといふ思想の表現である。この强い信念が即ちこの神話を成したので、かういふ神話が外の國にあるであらうか。開國以來君臣の分が明白である我が國でなければ、かういふ神話の出來ようはずがない。國土は即ち皇室であり、皇室は即ち國土であらせられるのである。尊皇は即ち愛國といふ觀念が、この中に看取されるのである。

我が國を開かせられた神の御末が即ち皇室である。皇室を尊奉する我等臣民は、遡つて皇室の御祖先を尊崇するは勿論であ

る。こゝに於て、尊皇の心の篤い者は、また必ず敬神の心が深いに相違ない。それ故、尊皇は卽ち敬神である。現神ををろがみ奉る眞心は、神祇に向つても同樣に捧げられなければならぬ。敬神、尊皇、愛國はかくして相離れぬのである。上古史を讀む者は、先づこの古代精神を看取して、それが現實の社會の上にも生きて居る事を思はなければならぬ。國史のいつの世にもこの精神の自覺された時に於て、國難が救はれた事を憶はなければならぬ。

皇室の御祖先を天照大神と申し上げて、それを天日卽ち太陽と見奉つた思想にも、實に我が國民の特殊な思想が現れて居る。世界の神話には太陽を中心に置いて居るものが多い。しかもそれが直ちに君臣の祖先であるといふのはない。これは敬神卽尊皇、卽愛國で、神、君、國の相離れない國でなければ生れ出て來ないのである。太陽の天地を照し、萬物を生育して行く絕大な勢力と無限の恩惠とは、どこの國の人も感知するに相違ないが、これを

その君主の遠祖と同一視する程に君德に感謝した國民は、外には見當らぬのである。國民が見當らぬのではない、太陽の德に等しい君德を施された王室が見當らぬのである。「義」(一)は君臣にして情は父子」といふ仁慈の政は、建國以來今日まで一貫して居るのである。その仁慈の政に悅服した歷代の國民等は、常に皇室の御爲には眞心を竭して仕へたのである。皇室の御仁慈が開國の昔から、深く國民の胸にしみ込んで居たので、太陽卽ち日神、卽ち皇室の御祖先と、相離れる事の出來ないやうになつたのである。

由來農業國民は殊に太陽の恩惠に感ずる事が多い。春蒔いて秋收める。一年の所得は皆天日の力によるのである。我が國もまた農を以て國を成した。その天日に對する尊崇は當然の事であるが、その恩惠に感謝すると同樣な感謝を以て皇室に對し奉つたところに、我が皇室對國民の、他國に見られない溫かみと美しさとが認められるのである。我が皇室の祭祀も、專ら國民の幸福

(一) 日本書紀第十四卷にある。第二十一代雄略天皇の御遺詔。

の爲に天神地祇に祈られるのが本旨で、かの祈年祭から始つて新嘗祭に終る豐年の御祈願の事も、偏に人民の幸福、國家の安寧を思し召すからの事で、君は臣の爲に祈り、臣は君の爲に祈るのが古神道の精神である。

天照大神は女性の神としてお立ちになつて居る。御自らも農事を遊ばした事は古典に見えて居り、大嘗を聞し召したとも傳はつてゐる。また機殿を設けて神衣を織らせられたとも記されて居る。誠に勤勉なお方であらせられた。弟神の素戔嗚命が農事を妨害したり、その他種々の暴行をなされた時も、常にこれを見逃して居られた程寛恕の德にも富ませられ、度量のお闊い神樣であつた。しかし素戔嗚命が天へ上つて來ると聞いて、こは我が國を奪ひに來るのではないかと、その時ばかりは男裝し、武裝し、稜威のをたけびにたけんで、御詰問になつた。常には平和主義で、國難に際しては奮然勇氣をお表しになつたので、御氣象が窺はれるのである。我が皇祖たる天照大神は、實際かくの如きお方でいらせられたと思ふが、また一方から考へれば、我が國民の理想が、この大神の御神格の上に現れたとも思はれるのである。

我が國列聖の御政治は、皆皇祖の御遺訓を繼承して行はれるのでいつの世に於ても、この仁慈の大御心を忘れられた事がない。常に神祇に祈つて國民の安寧幸福を希はれるのが卽ちマツリゴトであつて、これは今日に於ても遺つて居つて、それが卽ち宮中の祭祀である。皇祖から引繼がれた萬民愛撫の大御心、日神と同樣に仰ぎ見た萬民渴仰の誠心、これが世界に比類のない國家を成し得た所以で、萬世一系の意義は其所に存するのである。

我が國民と生れては、自國の歷史を讀む必要がある。過去なくして我等の今日はなく、今日なくして將來のあるはずはない。よく過去を知つて、更に將來の計を定めなければならぬ。外國の物質的または精神的事物を輸入するに際しても、國史を異にし、國

俗の同じくない事情を考へねばならぬ。無條件に模倣する事は遠慮しなければならぬ。

嗚呼我が記紀の二典よ。我等は二典を讀んで、其所に幾多の貴重な國民思想の發露されて居るのを見受けるのである。さうして我が帝國の今日あるのは、決して偶然でないといふ事を感ずるのである。千二百年以來、この二典はかくして常に新しい教訓を我等國民に與へ來つたのである。我が永世不朽な古典は、いかなる世にも新しい生命を有して、國民を啓發するのである。この典籍の存在する事は、實に我が國民の誇であつて、この典籍の忘れられない限り、我が國家の基礎はびくとも動かぬのである。

一九　皇道

清原貞雄[一]

支那では國を治むる道を王道と霸道とに分つてゐて、昔から王霸の論は儒教でも最もやかましいものである。王霸の別を簡明に言現せば、德を以て治めるのが王道であり、力を以て治めるのが霸道である。終始德を以て民に臨ませられた我が御歷代の政治は、まさしく王道であると見なければならぬ。しかし、支那の王道の說明を以てそのまゝ現す事は困難であつて、王道に於ては見る事の出來ない特殊の要素を含んでゐる。故に王道と區別して、特に皇道の名目を立てるのである。

皇道は建國以來、我が御歷代の天皇の國を治めるのに據り給うた道、また現に據り給へる道である。然らば皇道の內容はいかなるものであるか。獨斷を避けて衆と共に議するところの聚智主義の政治、民の利益を重んじ給ふところの御精神等も、もとより我が皇道の一要素であるが、これ等の外に考ふべきところは少くない。

第一に、「しらす」の政治を以て治國の理想としてをられる事である。「しらす」は「知る」の延言であつて、「統治する」の意味である。この「しら

(一) 歷史家、文學博士。廣島文理科大學教授。明治十八年(一八五四年)大分縣に生れた。

王道
霸道

しらす

うしはく

す」の語を、同じく君臨する意味を有する「うしはく」なる語と區別して用ひてゐる事は、我が皇道政治の上に極めて深い意義をもつてゐるのである。この區別を最も明瞭に現してゐるのは、武甕槌神が天神の命を受けて、出雲國にある大國主命に對して、その領國を天神の御子に奉るべき事を交渉した時に傳へた天神の御言葉である。「汝がうしはける葦原中國は、吾が御子のしらさん國なり」云々とある。「しらす」と「うしはく」とを區別して用ひたのはこれが初であるが、天照大神の神敕にも「爾皇孫就いて治らせ」とある。その後天皇の統治を言現すには必ず「しらす」の語を用ひ、決して「うしはく」とは言はない。また天皇を「すめらみこと」と申す。「すめ」は統べる事である。「みこと」は御事であつて、「方」と同じく人といふ語の敬稱である。統べる方といふ意味である。即ち、天皇は國家を統べしらし給ふのである。「うしはく」の「うし」は「主」と同語であつて、所有者を意味し、「はく」は「刀を

佩く」の「はく」で、身に附けてゐる事である。即ち「うしはく」は自分の私有物とするのである。「しらす」には公共的の意味があり、「うしはく」には私的の意味がある。昔から天皇が常に民の利益を先とし給ひ、政治は國家國民の爲に行ひ給ひ、御自身の利益の爲に行はせられなかつたのは、かく「すべしらす」事を政治の原則とせられたからであつて、我が國體上極めて重要な事實である。

第二は、文武、柔剛、何れの極端にも陷らず、よくその調和を保つて、中正の政治を行ふのを理想とせられた事である。我が國傳位の御信標、國家最高の寶物として、天照大神が皇孫にお授けになつた三種の神器こそ、實にその理想を表現したものである。

支那では鼎を以て傳位の寶器としてをる。蓋し、農を盛にして食物を豐富にし、これによつて人民の生活を安らかにする事が王者の天職であるといふ思想である。これに對して我が國の神器は、鏡、

劍、璽の三種である。この三種が國家の寶器として選ばれた精神に就いては、古來種々の解釋が行はれてゐるが、その起源をなすものは、蓋し日本書紀仲哀天皇の條に見える記事である。卽ち天皇が筑紫に行幸せられる時に、筑紫の五十迹手なる者が璽、鏡、劍の三器を捧げて天皇を奉迎して、次の如く申し上げた、

八尺瓊の勾れるが如く以て曲妙に天の下しろしめせ。白銅鏡の如く以て分明に山川海原を看行せ。乃是の十握の劍を提げて天下を平けたまへ。

鎌倉時代以後、神道を論ずる者は、多くはこの五十迹手の言によつて、我が三種の神器の意義を說いてゐるのである。

吉野朝時代に於て、北畠親房はその著神皇正統記に、三種神器に就いて次の如く述べてゐる。

鏡は一物をたくはへず、私の心なくして萬象を照すに、是非善惡の姿あらはれずといふ事なし。その姿に從ひて感應するを德とす。これ正直の本源なり。璽は柔和善順を德とす。慈悲の本源なり。劍は剛利決斷を德とす。智慧の本源なり。この三德をあつめ受けずしては、天下の治らん事誠に難かるべし。

卽ち鏡に正直の德を配し、玉に慈悲の德を配し、劍に智慧決斷の德を配し、これを以て我が國の政治の理想とするといふのである。

江戸時代に入つてからは、多くの學者はこれを智仁勇の三德に配當し、支那の中庸は我が三種神器の注解であると說いてゐる。勿論これ等は後世になつてからの說であるが、三種の神器が傳位の御信標であると言ふばかりでなく、鏡、璽、劍の三種が特に選ばれてゐる所に、必ず確乎たる意義を含んでゐるのであつて、そのいかなる意義であるかに就いては、人によつて色々の說があるであらうが、大體に於て鏡が公明正大を表し、璽が仁惠を表し、劍が武德を表

す事は間違ないと思ふ。北畠親房が神皇正統記の中に、天壤無窮の神敕、及び「この鏡を視ること朕を視るが如くせよ。」といふ神敕を記した後に、

またこの鏡の如くに分明なるをもちて天下に照臨し給へ、八坂瓊のひろがれる如く曲妙を以て天下を治食せ、神劍を提げて歸順はざる者を平らげ給へと敕りましけるとぞ。

と言つてゐるのは、仲哀天皇紀にある五十迹手の語を神敕であるとした鎌倉時代の神道家の說をそのまゝ取つてゐるのであつて、古傳とは違つてゐるが、三種神器の表す統治の理想は、まさしく其所にあつたものであらう。卽ち、鏡は萬象をあるがまゝに映すものであつて、少しの僞をも容さない。これは正直、公明、正大の德を表す。璽は圓滿であり、且潤澤のあるものであつて、仁慈の德を表す。劍は剛利決斷の武の德を表す。これ等の諸德は、個人の守るべき道德としても、そのまゝ價値をもつてゐるのであるが、これを政治上の理想にあてはめる時は、公明正大で少しの陰影もなく、譎詐もない事と、仁慈を旨とする「しらす」の政治を根本とする理想を、鏡と璽とによつて表現してゐる事と見る事が出來るであらう。

かく仁慈を旨とするが、いはゆる無抵抗主義ではない。我が國の理想は强國主義である。鏡と玉とによつて表現するところの「しらす」の政治を受容れずして、何所までも反抗せんとする不逞の徒に對しては、斷乎として破邪の劍を振ひ、天誅を加ふるのである。或は外部から來つて我が國を侵さんとする者があらば、これを打攘ふのである。この剛に偏せず柔に偏せざる中庸の政治こそ、實に我が皇道の特色である。

第三は、空理に囚はれず、時の宜しきに順應して最善の政治を行ひ、必ず統治の美績を擧げる事を理想とする事であり、第四は、常に

正しきを養ふ心を以て心とし給ふ事、第五は、天皇は國家を以て家とし、國民と休戚を共にし給ふ事である。この三つは、何れも神武天皇が大和を平定して橿原に都をお奠めになつた時に降された詔勅に現れてゐる。

我東征しより茲に六年なり。皇天の威を被りて兇徒は殺された り。邊の土未だ靜まらず、餘妖なほ荒れたりと雖も、じかも中國にはまた風塵なし。誠に宜しく皇都を廣めひらき、みあらかをはかり作るべし。而して今、運この屯蒙に屬ひ、民の心素朴なり。巢に棲み、穴に住む習俗、常となれり。それ大人の制を立つるや、義必ず時に從ふ。苟も民に利あらば、何ぞ聖の造に妨はん。またまさに山林を披き拂ひ、宮室を經め營りて、恭んで寶位に臨み、元々を鎮め、上は則ち天つ神の國を授くるの德に答へ、下は則ち皇孫の正しきを養ひ給ふ心を弘め、而して後に六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて家となさんこと、またよからずや。

「義必ず時に從ふ。苟も民に利あらば、何ぞ聖の造に妨はん」と言ふのは、唯形式を整へ、徒に高遠な理想を立てて、それが實際に顯現するや否やを顧ないやうな無意義な事を斥けて、唯その時宜に最も適した政治を行つて、專ら國民の利益を主とし給ふ御精神を示されたものである。「下は皇孫の正しきを養ひ給ふ心を弘め」と言ふのは、上、天つ神に答へ奉るに對して、下は國民の爲に、常に正道を蹈んで正しき政治を行ふ事を目標として、何所までも努め給ふ御心である。「八紘を掩ひて家となす」と言ふのは、政治を以て何所までも公事として、私事、私家の利益の爲としない事である。我が國に於て、天皇が國家全體を表現してをられるのはこの爲である。フランスのルイ十四世が、「朕は國家なり。」と言つたのは、極端な專制主義を表明した言葉であるが、日本に於て天皇卽國家と言ふのは、日本といふ國

が、天皇御一身によつて表現されてをり、天皇を外にして國家なく、天皇の御榮えは國家の榮えである事を意味するのである。仁德天皇が「百姓の富めるは朕の富めるなり。」と宣はせられたのも、同一の御精神である。我が國に於ては、國家の外に天皇があらせられる事は考へられない。我が皇室に姓名のないのもこの爲である。

我が皇道は以上を以て盡きてゐるのではないが、これ等は何れも我が皇道の最も貴い所以の根本であつて、この皇道によつて三千年來惠まれ來つた國民の、常に心に銘記してゐなければならぬところである。

(一)宗安時代の歌人、文學者。古今集撰者の一人。天慶九年(一六〇六年)歿した。

(二)承平五年(一一一五九年)十二月。前年十一月二十一日土佐國出發。

(三)同國長岡郡の港。今不詳。

(四)同國安藝郡にある。今は奈半利町と言つてゐる。泊をおふ

二〇　都がへり

紀貫之

別離

九日。つとめて大湊より那波の泊をおはんとて漕出でけり。これかれ互に國の境のうちはとて、見送に來る人あまたが中に、藤原言實、橘季衡、長谷部行政等なん、御館より出で給ひし日より、こゝかしこに追來る。この人々ぞ志ある人なりける。この人々の深き志は、この海にも劣らざるべし。これより今は漕ぎはなれて行く。これを見送らんとてぞ、この人どもは追來ける。かくて漕行くまに〳〵、海のほとりに留る人も遠くなりぬ。舟の人も見えずなりぬ。岸にも言ふことあるべし。舟にも思ふことあれどかひなし。かゝれどこの歌をひとり言にしてやみぬ。

おもひやる心はうみをわたれども
ふみしなければ知らずやあるらん

傳紀貫之館址

かくて宇多(一)の松原を行過ぐ。その松の數いくそばく、幾千年經たりと知らず。本ごとに浪打寄せ、枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。おもしろしと見るにたへずして、舟人の詠める歌、

見わたせば松のうれごとにすむ鶴は
　ちよのどちとぞおもふべらなる

とや。この歌は所を見るにえまさらず。

かくあるを見つゝ漕行くまに〳〵、山も海もみな暮れ、夜ふけて、西東も見えずして、天氣(て)のこと楫取の心にまかせつ。男もならばぬはいとも心ぼそし。まして女はふなぞこに頭をつきあてて、音をのみぞ泣く。かく思へば、舟子、楫取はふなうた歌ひて、何とも思へらず。

海路

十六日。風浪やまねば、なほ同じ所にとまれり。たゞ海に浪なくして、いつしか深崎(みさき)(二)といふ所渡らんとのみなん思ふを、風、浪ともにやむべくもあらず。ある人の、この浪たつを見てよめる歌、

霜だにもおかぬかたぞといふなれど
　なみのなかにはゆきぞふりける

さて舟に乘りし日より今日までに、二十日あまり五日になりにけり。

十七日。曇れる雲なくなりて、曉月夜いとおもしろければ、舟を出して過行く。このあひだに雲の上も、海の底も、同じ如くになんありける。うべも昔のをのこは、

棹(一)はうがつ波の上の月を
　舟はおそふ海のうちの天を

とは言ひけん。聞きさしに聞けるなり。またある人の詠める、

水底の月のうへより漕ぐふねの
　さをにさはるは桂なるべし

(一)今の香美郡赤岡町。
うれ
思へらず
(二)今の安藝郡室戸町。
曉月夜
(一)「棹穿波底月。舡脚水中天。」(賈島)

これを聞きて、ある人のまた詠める、

かげ見れば波の底なるひさかたの
空こぎわたる我ぞわびしき

かく言ふあひだに、夜やうやく明行くに、楫取等「黑き雲にはかに出で來ぬ。風も吹きぬべし。御舟かへしてん」と言ひてかへる。このあひだに雨降りぬ。いとわびし。

都がへり

十一日。雨いさゝか降りてやみぬ。かくてさしのぼるに、東の方に山の横ほれるを見て人に問へば、八幡の宮と言ふ。これを聞きて、喜びて人々拜み奉る。山崎の橋見ゆ。うれしきこと限りなし。こゝに相應寺のほとりに、暫し舟をとゞめて、とかく定むることあり。この寺の岸のほとりに柳多くあり。ある人、この柳の影の川の底に映れるを見て詠める歌、

(一)承平五年二月十一日。
(二)石清水八幡宮。横ほる
(三)京府(山城國)乙訓郡大山崎村。
(四)山崎の橋の西にあつたと言ふ。とかく定むることあり

さゞれ浪よするあやをば青柳の
かげのいとして織るかとぞみる

十六日。今日の夕つ方、京へのぼるついでに見れば、山崎のたなる小櫃の繪も、まがりの法螺の形もかはらざりけり。賣る人の心をぞ知らぬとぞ言ふなる。かくて京へ行くに、島坂にて人あるじしたり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、來る時ぞ人はとかくありける。これにもそれにも、かへりごとす。

夜になして京には入らんと思へば、急ぎしもせぬ程に、月出でぬ。桂川月の明きにぞ渡る。人々のいはく、「この川飛鳥川にもあらねば、淵瀬更に變らざりけり」と言ひて、ある人の詠める歌、

ひさかたの月におひたるかつら川
そこなる影もかはらざりけり

またある人の言へる、

(一)乙訓郡石塔寺の南。あるじす

天ぐものはるかなりつるかつら川
　そでをひでても渡りぬるかな

またある人の詠める、

かつら川わがこゝろにも通はねど
　おなじ深さにながるべらなり

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜更けて來れば、所所も見えず。京に入りたちてうれし。家に至りて門に入るに、月あかければ、いとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまさりて、言ふかひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も、荒れたるなりけり。中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、のぞみて預れるなり。されば、たよりごとに物も絶えず得させたり。今宵かゝる事と、こわだかにものも言はせず、いとはつらく見ゆれど、志をばせんとす。さて池めいて、くぼまり水づける所あり。ほとりに松もありき。五年、六年の

志をせん

うちに、千年や過ぎにけん、片枝はなくなりにけり。今生ひたるぞまじれる。大方みな荒れにたれば、哀れとぞ人々言ふ。思ひ出でぬ事なく思ひこひしきがうちに、この家にて生れし女子(をんなご)の、もろともに歸らねば、いかゞは悲しき。舟人もみな子抱きてのゝしる。かゝるうちになほ悲しみに堪へずして、ひそかに心知れる人と言へりける歌、

うまれしもかへらぬものをわが宿に
　小松のあるを見るがかなしさ

とぞ言へる。なほあかずやあらん、またなん、

みし人を松のちとせにみましかば
　遠くかなしきわかれせましや

忘れがたく、口惜しきこと多かれど、えつくさず。

——土佐日記——

二一　美しい心を保て

吉田絃二郎[一]

(一)小說家。名は源次郎。明治十九年(一八八六)佐賀縣に生れた。

單純から複雜へ。無自覺から自覺へ。他力から自力へ。始めて世の中へ出る若い人々は、必ずこのやうな經驗を意識するに違ない。

學校生活は社會に於けるよりは理想的である。

其所では階級的差別や、貧富の觀念は餘り問題にされない。時としては、貧しいといふ事が名譽とされる事もある。清貧だの、殉教だの、節操だのといふやうな言葉に胸をとゞろかせるのも、この時代である。學園内に於ける若い人々の生活は、この地上に於けるユートピヤに最も近いものだと言ふ事が出來よう。

一歩世の中に出ると、恐らく若い人々のユートピヤは破壞されるであらう。世の中には彼等が考へてゐる程、清貧を樂しむ人は多くゐない。殉教者も少い。隣から隣へ俗人が多い。我利的な人が多い。

殉教

無節操な人が多い。不深切な人が多い。

學園の生活は詩である。世俗の生活は散文である。

しかし、學園の生活は、要するに人生の一準備的階段に過ぎない。所詮、人は死ぬ日まで世俗の人間として生きなければならぬ。若い日の快い詩のみに醉つてはゐられぬ。苦澁な散文の中に生きて行かなければならぬ。人生とは寧ろ苦澁凝滯の散文の世を指して言ふのである。其所は覺めた人々の生活場である。一本だちの人々の眞劍な生活場である。苦しい事も、悲しい事も、自分一人で決めてかからなければならぬ生活場である。他人に賴つてはをられぬ世界である。眞實に人間といふもの、人生といふものがわかつて來るのは、その散文的世界に於てである。

或西洋の作家は、たとひ七つの星の世界の重さは計る事が出來ても、唯一つ永遠に測り知る事の出來ないものがある。それは人間

その物であると言つてゐる。誠に人間といふもの、人間といふものの心程、不可思議なものはないであらう。すべての藝術も、宗教も、哲學も、人間の不可測な不可思議を巡つて作り出されてゐる。

世の中とは、畢竟、この不可測な不可思議をもつた人間の心と心との結合の上に、もつれの上に編上げられた現實でなければならぬ。その不可思議な網のもつれを解きほごす事の出來るのは、世の中の複雜性その物の中へ飛込んでからでなければならぬ。

近松の傑作が生れるのも、この溷濁した複雜な俗世間の中に、作者の魂が浸され切つた後でなければならぬ。

世の中は複雜である。複雜であるが故に、その中には汚れたものもある。醜いものもある。詛はしいもの、あさましいものもある。同時に、世の中でなければ見出せない聖いもの、尊いもの、美しいものもある。世の中へはいつて行く時、人は始めて美のいかに美しく、人の

心のいかに尊いものであるかを實感する。同時に、彼自身醜いもの、あさましいものにも慣れ親しみ易い機會に多く接しなければならぬ。世の中へ飛込むといふ事は、大きな、しかし、愉快な冒險でなければならぬ。複雜極りない世の中へ飛込んで、清淨なもの、尊いものを體驗するか、或は醜いもの、あさましいものに慣れてしまふかといふ事は、自身の心の置き方一つであり、其所から人生をよく生きるか、惡く生きるかの二つの途が別れる。

いつまでも子供の心を失はない者は天國に入るといふのは、世の中へ飛込んで、醜いもの、あさましいもの、利己的なもの、虛榮的なものの渦卷の中に置かれながら、子供の心を失はない者のみが、よい生き方をする事が出來るといふ事でなければならぬ。

家屋敷をもつ事や富をもつ事が、決してよい生き方ではない。十臺、二十臺の人々には、こんな事は問題にならないかも知れぬ。しか

し、三十臺、四十臺の人々には、それが大事な問題になつて來る。彼等は既に世の中の醜い影に襲はれつゝあるからである。

人を疑つてはならぬ。人を輕蔑してはならぬ。

若い人々に取つては、これは問題でないかも知れない。しかし、幾たびか僞られ、また裏切られた苦しい經驗をもつた世の中の人々は、人を疑ふやうになる。輕蔑するやうになる。氣の毒な墮落である。

子供は人を疑はない。人を輕蔑しない。子供の心を失つてはならぬ。

若い人々の眼はいつも美しい。その眼の美しさを失つてはならぬ。心が曇る時に眼も曇る。

帝國讀本　改制新版　卷十　終

附　錄

一　敬讓語（口語）
一　敬讓の意を含む文語動詞
一　國語假名遣一覽

敬讓語（口語）

一　名詞

（甲）お年　お顏　お宅　お歸り　お休み　おいくつ
おいくたり　お一つ　お十一　御返事　御挨拶
御機嫌　御本
（乙）神さま　井上さん　太郎君、
（丙）お母さま　お弟さん　御尊父さま

二　人代名詞

自稱	對稱	他稱	不定稱
わたくし わたし	あなたさま あなた	この（お）かた その（お）かた あの（お）かた	どの（お）かた どなたさま どなた

三　動詞

（甲）本來の敬讓語〔○印は連語を示した〕
あがる・召しあがる（食フ、飲ム）
あそばす・なさる（爲ル）
いらっしやる（來ル、行ク、居ル）
おっしやる（言フ）
おぼしめす（思フ、考ヘル）
くださる（與ヘル）
見える（來ル、居ル）
めす（呼ブ、着ル、穿ク、乘ル、買フ）
〔以上、尊敬の意を含むもの〕
○お出でになる、お出でなさる（來ル、行ク、居ル）
あがる、參上する（訪ネル、行ク）
あげる、さしあげる（與ヘル）
いたす、つかまつる（爲ル）
いただく、頂戴する（貰フ、食フ、飲ム）
うかがふ（聞ク、訪ネル）
ございます（居ル、有ル）
存ずる、存じ上げる（知ル）

たべる（食フ）
申す、申上げる（言フ）
まゐる（行ク、來ル）
拜見する（見ル）　拜借する（借リル）
拜讀する（讀ム）　拜聽する（聞ク）
○お目にかかる（面會スル）　お目にかける、御覽に入れる（見セル）（以上、（ヘリ下る意、丁寧の意を表すもの）

（乙）敬讓動詞のつくり方〔○印は連語を示した〕

お歌ひ
遊ばす
なさる
下さる
に、なる

御苦勞
遊ばす
なさる
下さる
に、なる

○見て下さる、讀んで下さる（以上、尊敬の意を含むもの）

お屆け
申す
申上げる
致す

お供
申す
申上げる
致す

○お屆けする、お供する（以上、（ヘリ下る意のもの）

（丙）尊敬の意の添へ方（助動詞「れる」「られる」を附ける）
父は英書も讀まれる。
今日は佐藤君も來られる。

（丁）丁寧の意の添へ方（助動詞「ます」を附ける）
先生も仰つしやいます。
私からも申上げます。
先生もお歌ひになります。
私もお供致します。
紙が飛びます。

四　形容詞

（甲）「お」を附ける。
こんなにお暑いのに……。
お恥しい次第ですが……。

（乙）「です」「ございます」を附ける。
これは古い(の)です。
これは新しうございます。
それはお高い(の)です。
それはお珍しうございます。

五　形容動詞（「お」「ご」を附ける）

それはお珍しからう。
若しお寒かつたら……。
あそこはお靜かでせう。
あそこはお靜かでしたか。
そんなにご丈夫なら、もう安心ですね。
ご丁寧な御挨拶で痛み入ります。

六　副詞

おまめにお働きなさいますね。
ごゆつくりなさいまし。
ここはお靜かではございません。

七

「で、ある」「だ」の意
助動詞「です」、連語「でございます」などを用ひる。
あれは學校です。
あれは學校でございます。
あのかたは先生でいらつしやいます。
大將はその時、少將でお出でになつた。

敬讓の意を含む文語動詞

（甲）尊敬の意を含む語

あそばす（爲ル）
います、ます、ます、します（アル、居ル、行ク、來ル）
おはす、おはします（同前）
おほす（言フ、言ヒツケル）
おぼす、おぼしめす（思フ）
きこしめす（聞ク、飲ム、食フ）
しろしめす（知ル、統べ治メル）
たてまつる（著ル、乘ル）
たまふ、たぶ（與ヘル）
のたまふ（言フ）

（乙）へり下る意、丁寧の意を含むもの

いたす、つかまつる（爲ル）
うけたまはる（聞ク、承諾スル）
さふらふ（アル、居ル）
きこゆ、まうす（言フ）
たてまつる、まゐらす（與ヘル）
たまはる（貰フ、受ケル）
はべり（アル、居ル）
まかる（退ク、歸ル、行ク）
まゐる（行ク）
まゐる（飲ム、食フ、著ル）
みそなはす（見ル）
めす（飲ム、食フ、著ル、乘ル）
わたる（アル、居ル）

國語假名遣一覽

わ（は）

わ（輪）
くちわ（口輪—轡）
おほわ（大輪）
おもわ（面輪）
はにわ（埴輪）
わ（廓）
くるわ（廓）
わ（曲）
うらわ（浦曲）
いそわ（磯曲）
あわ（沫）
あわもり（泡盛）
みなわ（水沫）
わけ（分）
いひわけ（言分）
ことわけ（辭分）
おひわけ（追分）
のわき（野分）
わけがら（譯柄）
ひきわけ（引分）
わた（綿）
わた（腸）
はらわた（腸）
このわた（海鼠腸）
こわ（聲）
こわいろ（聲色）
こわね（聲音）
こわづかひ（聲遣）
こわづくろひ（聲づくろひ）
こわだか（聲高）
わざ（業）
しわざ（仕業）
ことわざ（言業—諺）
わり（割）
ことわり（事割—理）
しわ（皺）
ひわ（鶸）
たわら（俵）
いわし（鰯）
あわつ（周章）
たわし（束藁子）
くわね（慈姑）
たわやか（嫋娟）
たわやめ（手弱女）
たわむ（撓む）
よわし（弱し）
かわく（乾く）
さわぐ（騷ぐ）
すわる（坐る）
あわたゞし（惶し）
さわやか（爽か）
たわいなし

語の中や下に來る「わ」は右に擧げた他は「は」を用ひる。例へば
川澤　翠瓦　雞庭
桑諏訪　安房　永久　繩
障廻る　變る　かはいらし等

ゐ（い）

ゐ（井）
ゐど（井戸）
ゐげた（井桁）
ゐぜき（井堰）
ゐづつ（井筒）
ゐくひ（井杭）
ゐで（井手—堰）
ゐなか（井中—田舍、田園）
ゐもり（井守—蠑螈、蜥）
ゐ（居）
ゐざり（居去—膝行）
かもゐ（鴨居）
しきゐ（敷居—閾）
くもゐ（雲居）
くらゐ（座居—位）
とのゐ（殿居—宿直）
まとゐ（圓居）
もとゐ（本居—基）
まゐる（目居る—參る、詣る）
ゐ　猪（ゐのしゝ）
ゐのこ（亥の子—豚）
ゐくび（猪首）
いぬゐ（戌亥—乾）
ゐ（亥）
ゐる（率）
ひきゐる（引率る—率る、將る）
もちゐる（持率る—用、以）
ゐ（藺）
おほゐ（大藺）
ゐぐさ（藺草）

あゐ（藍）
くれのあゐ（呉の藍—紅）
なゐ（地震）
うなゐ（髫髮）
かたゐ（乞食）
くわゐ（慈姑）
あぢさゐ（紫陽花）
ゐろり（爐）
ゐや（禮）
「**ゐ**」の假名をつかふ語は右に揭げたもので、その他、上に來る「**い**」の音は「**い**」を用ひる。例へば
今　糸　石　岩　池　犬
急ぐ　怒る　頂く　往ぬる
訝る　いたはる等

い音便
さいたま（埼玉）
さいはい（幸）
きさい（后）
ついたち（月立—朔）
ついたて（衝立）
やいば（燒刃—刄）
かい（蚤—櫂）
かうがい（髮搔—笄）
たいまつ（燒松—松明）
ついぢ（築地）
かいしろ（垣代）
かいぞへ（介添）

さいで（咲いて）
といて（解いて）
ついで（次いで—序）
ついばむ（啄む）

加音
しいか（詩歌）
しいじ（四時）
むいか（六日）
語の中や下に來る「**い**」は右のものだけで、その他は「**ひ**」を用ひる。例へば
鯛　貝　鯉　笈　鸞
舞　論　假令　小し　問ひ
疑ひ　買ひ　思ひ等

う（ふ）

う音便
あきうど（商人）
いもうと（妹人—妹）
おとうと（乙人—弟）
なかうど（仲人—媒酌）
くろうと（黑人—玄人）
しろうと（白人—素人）
かうし（格子）
かうべ（神戸）
こうぢ（小路）
てうず（手水）
かうぶり（冠）
たうげ（手向—峠）

ひうが（日向）
こうや（紺屋）
はうき（箒）
かうち（河內）
ひやうし（拍子）
まうで（詣で）
たかう（高う）
ならうて（習うて）
おもうて（思うて）
とうて（問うて）
かたじけなうす（辱うす）
まうす（申す）

加音
やうか（八日）
まうく（設く）
やうやう（稍、漸）
にようばう（女房）
ふうふ（夫婦）
語の中や下に來る「**う**」は右の樣な場合で、この他は「**ふ**」を用ひる。例へば
食ふ　言ふ　思ふ　購ふ
補ふ　償ふ　仰ぐ等

ゑ（え）

ゑ（繪）
ゑま（繪馬）
ゑのぐ（繪の具）
ゑがく（畫く—描く）
ゑどる（彩る）

ゑ（巴）
ゑる（彫る）
ゑぐる（剜る）
ゑむ（笑む）
ゑがほ（笑顏）
ゑくぼ（靨）
ゑつぼ（笑壺）
ゑむ（咲む）
ゑ（餌）
ゑさ（餌）
ゑぶくろ（餌袋）
ゑばこ（餌箱）
ゑぼうし（烏帽子）
ゑんじゆ（槐）
こゑ（聲）
つゑ（杖）
つくゑ（机、几）
ゆゑ（故）
ゆゑん（所以）
すゑ（据ゑ）
すゑぜん（据膳）
すゑふろ（据風呂）
いしずゑ（礎）
すゑもの（陶器）
すゑひろ（末廣）
こづゑ（梢）
うゑ（餓）
うゑじに（餓死）
うゑき（植）
うゑき（植木）

うゑこみ（植込）
えぐし（蔬し）
上中下に來る「**ゑ**」は右の場合だけでこの他、上に來る「**え**」の音は「**え**」を用ひる。例へば
蝦　枝　簸　榎　蝦夷　夷
選ぶ　襟　似而非　得物等

え（兄）
きのえ（木の兄—甲）
ひのえ（火の兄—丙）
つちのえ（土の兄—戊）
かのえ（金の兄—庚）
みづのえ（水の兄—壬）
え（枝）
しづえ（下枝）
すはえ（條）
え（江）
いりえ（入江）
ふえ（笛）
ぬえ（鵺）
はえ（蠅）
ひえ（稗）
さゞえ（蠑螈）
ながえ（轅）
え（柄）
こえ（肥）
やまごえ（山越）
みえ（見え）
はえ（生え）
いえ（癒え）
あまえる（甘える）
おびえる（脅える）
おぼえる（覺える）
さえる（冴える）
たえる（絕える）
ふえる（殖える）
中下に來る「**え**」は右の場合でこの他は「**へ**」を用ひる。例へば
家　苗　膚　楓　蛙　歸る
暇る　喘ぐ　敢へて　剩へ
堪へる　悶へる等

を（お・ほ・ふ）

を（男）
をとこ（男）
をのこ（男）
をつと（夫）
ますらを（丈夫）
みやびを（風流男）
さつを（獵夫）
をひ（甥）
をゝし（雄々し）
をす（牡）
をしか（小牡鹿）
めをと（夫婦）
を（緒）
たまのを（玉の緒）
はなを（鼻緒）
ほぞのを（臍帶）
を（小）
をぢ（伯父、叔父）
をば（伯母、叔母）
をす（小簾）
をがは（小川）
をみごろも（小忌衣）
をぐな（童男）
をとめ（少女）
をんな（女）
をなご（女子）
をみなへし（女郎花）
をぎ（荻）
を（尾）
をばな（尾花）
みを（水脈）
みをつくし（澪標）
とを（十）
をろち（大蛇）
を（麻）
をだまき（苧環）
をだまき（緒環）
をから（麻幹）
をけ（苧笥—桶）
をさ（戔）
を（岑）
をとし（緒通し—緘）
をのへ（尾の上—岑上）
をか（岡—丘、陵）
をかぼ（陸稻）
をさ（長）
むらをさ（村長）
ふなをさ（船長）
しでのたをさ（死出田長）
をさなし（幼、稚）
をさをさ（大抵）
をち（遠）
をちこち（遠近）
をととひ（一昨日）
をととし（一昨年）
をる（折）
たをを（手折る）
をしき（折敷）
つゞらをり（九十九折）
しをり（栞）
しをる（萎る）
をこ（愚）
をこがまし
をこぜ（臘）
をを（唯）
かはをそ（鱒）
をしどり（鴛鴦）
をの（斧）
をり（檻）
をしね（晩稻）
あを（青）
いさを（功）

いさを し（績—勳）
ばせを（芭蕉）
みさを（操）
やをら（徐）
たをやか（嬋娟）
たをやめ（手弱女）
をとり（囮）
をかす（犯す）
をがむ（拜む）
をどす（威す）
をす（食す）
をさむ（治む）
をさむ（納む）
をさむ（藏む）
をしむ（惜しむ）
をしふ（教ふ）
をふ（終ふ）
をはる（終る）
をめく（叫く）
をのく（戰く）
をどる（踊る—躍、踴）
をる（居る）
あをむく（仰く）
かをる（香る—薫）
まをす（申す）
しをる（撓る）
をかし（可笑し）
をし（愛し—惜）
くちをし（口惜）
をさなし（幼し）

さを（竿）
つりざを（釣竿）
みさを（水竿—棹）
うを（魚）
いを（魚）
ひを（氷魚）
しらを（白魚）
いをのめ（魚の目—眦）
かつを（鰹）

右の外、上には「お」を用ひ、中下には「ほ」を用ひる。例へば

親　沖　弟　鬼　祖父　驚く　遲く　恐し等
顏　鹽　潮　火の穗（焰）
氷　郡　蟋蟀　透る　滯る
直し　遠し　通す等

中下に「ふ」を用ひ、文語では轉呼音で「お」と發音するものがある。例へば

問ふ　思ふ　買ふ　添ふ
願ふ　貰ふ　拾ふ　習ふ
訪ふ　沿ふ　乞ふ　扱ふ
害ふ　違ふ　誘ふ　纏ふ
事ふ　拂ふ　叶ふ　憂ふ

候ふ　扇ぎ　仰ぐ　葵　樗
近江　今日　昨日　倒る　貴し　尊ぶ等

ぢ（ヂ）

ぢ（父）
おほぢ（祖父）
をぢ（伯父—叔父）
ぢぢ（祖父）
ぢぢ（老翁）
ぢぢむさし
をぢ（小父）
すぢ（筋）
うぢ（氏）
ぢ（路）
こうぢ（小路）
ひぢ（肘）
あぢ（味）
あぢ（鯵）
かぢ（梶）
かぢ（楮）
かぢ（鍛冶）
ひぢ（泥）
ふぢ（藤）
ふぢばかま（藤袴）
かうぢ（麹）
くぢら（鯨）
ことぢ（琴柱）
ねぢ（鋸）
わらぢ（草鞋）
なんぢ（汝）
なめくぢ（蛞蝓）
もみぢ（紅葉）
はぢ（耻）
ふぢな（蒲公英）
あぢさゐ（紫陽花）
みそぢ（三十）
よそぢ（四十）
いそぢ（五十）
むそぢ（六十）
かぢめ（搗布）
ちぢむ（縮む）
ねぢる（捻る）
とぢる（閉ぢる）
とぢる（綴ぢる）
はぢる（耻ぢる）
よぢる（攀ぢる）
ひぢる（濡ぢる—泥）
もぢる（捩ぢる）
ねぢける（佞る）
あぢはふ（味ふ）

「ぢ」を用ひるのは右の語だけで、他は「じ」を用ひる。例へば

虹　雉　籤　躑躅　交る
詰る　辱し　著し等

ず（づ）

かず（數）
きず（傷）
くず（葛）
はず（筈）
ゆはず（弭）
もず（鵙—百舌鳥）
みゝず（蚯蚓）
はずみ（機）
ねずみ（鼠）
あんず（杏）
すず（鈴）
すず（錫）
すずむし（鈴蟲）
すずき（鱸）
すずな（菘）
すずしろ（大根）
すずめ（雀）
すずし（生絹）
すずろ（漫）
ずず（數珠）
ずさ（從者）
ずはえ（條）
いしずゑ（礎）
くず（國栖）
こずえ（梢）
かならず（必ず）
たたずむ（佇む）
なずらふ（準ふ）
ひずむ（歪む）
すずし（涼し）
すずり（硯）
まず（交ず—混）
ゆず（柚子）

右の他は「づ」を用ひる。例へば

水　肩　泉　雷　酸漿　渦
煩ふ　貧し　續く　かゝずらふ等

大正十四年二月十二日印刷
大正十四年二月十四日發行
昭和五年八月十日訂正再版發行
昭和六年十二月十日訂正三版發行
昭和十二年十二月十三日訂正四版發行
昭和十二年十二月十六日訂正八版印刷
昭和十二年十二月十六日訂正八版發行

昭和九年七月四日訂正五版發行
昭和九年十月三十日訂正六版發行
昭和十二年六月二十五日訂正七版印刷
昭和十二年六月二十八日訂正七版發行

定價 卷一—卷九金六拾錢
卷十 金五拾五錢

帝國讀本 改制新版

編者 芳賀矢一
訂補者 上田萬年
同 長谷川福平
發行者 合資會社 冨山房 東京市神田區神保町一丁目三番地
代表者 坂本嘉治馬
印刷所 東京印刷株式會社 東京市深川區白河町四丁目一番地

發行所 合資會社 冨山房
東京市神田區神保町一丁目三番地
電話神田二一七一—二一七八番振替口座東京五〇一番

HAGA 檢 賀

千早ぶる　神の時代より
日の本の
國のつくりしめし
六十六つの山

小林乙二